Midst others of less note, came one frail Form,
A phantom among men, companionless
As the last cloud of an expiring storm
Whose thunder is its knell; he as I ghess,
Had gazed on Nature's naked loveliness,
Actaeon-like, and now he fled astray
With feeble steps o'er the world's wilderness,
And his own thoughts, along that rugged way,
Pursued, like raging hounds, their father and their prey.

A pard-like Spirit beautiful and swift—
A Love in desolation masked—a Power
Girt round with weakness; it can scarce uplift
The weight of the superincumbent hour;

It is a dying lamp, a falling shower,
A breaking billow;—even whilst we speak
Is it not broken? On the withering flower
The killing sun smiles brightly: on a cheek
The life can burn in blood, even while the heart may break.

His head was bound with pansies over-blown,
And faded violets, white, and pied, and blne;
And a light spear topped with a cypress cone,
Round whose rnde shaft dark ivy-tresses grew
Yet dripping with the forest's noon-day dew,
Vibrated, as the ever-beating heart
Shook the weak hand that grasped it; of that crew
He came the last, neglected and apart;

A herd-abandoned deer struck by the hunter's dart.

世に知られない人々の間に、ひよわい姿が現れた。
人の世に出た一人の幽靈は、
收まるあらしの名殘りの雲のやうだ。
その鳴る神は、己れを葬る鐘のひゞき。
「自然」のやさしいあらはの姿を、
Actæon（アクテイオン）のやうに眺めてか、
この世の荒野を、覺束なくもふみ迷ひ、
己が思想（おもひ）は怒り狂へる獵犬（かりいぬ）となつて、
險しい路にあるじを獲物と追ひ立てた。

豹のやうな美しくすばやい魂。
寂しう裝うた愛。
柔かみに蔽はれた力。
それは「時」の抑へる重さをあげ得ない。
こはこれ消ゆる燈火、落つる雨、くだくる波。
我等の語る時だにも、
その話は破らる。
凋む花にも日はるゝみかゞやきて枯らす。
心の破れる折とても、いのちの血潮は頰に燃ゆる。
咲き過ぎた思ひ草や、

白や青や染分けの、萎えた菫をかうべにまとひ、
眞晝の森にも露の滴る、
蔦がからんだ糸杉（哀傷の表象）の幹、
その實をとつて穗先につけた纖い槍は、
それを握つたかよわい手先が、
戰ぐ心に震へる度ごとにゆれる。
仲間はづれてうしろから、顧られずについて行く。
獵人の矢を受けて、友に後れた鹿のやうに。

「註。Actaeon は獵夫であつた。不圖森の中の泉に浴みする月の女神 Diana を見た。ダイアナは怒つて、立所に彼を鹿に變へると、今まで引連れて居た多くの獵犬は、彼を追ひ立てゝみ嚙み殺して終つた」

彼はキーツを罵つた筆者を憤り、更に進んで、「キーツは死んで居ない。彼は眠らない。生の夢からか醒めた。彼は「自然」と一つになつたのだ」と考へて、せめて自らを慰めて居る。アドヲースはもと來た「燃ゆる泉」へ逃れ、「久遠の一部」となり、彼の聲は自然の音樂として、雷のうめきにも、鳥の歌にも聞える。彼は此の世の愛すべきもの——彼の詩ではいよ〳〵愛すべきものとなつて居る——の一部である。彼は Chatterton（チヤタートン）や Sidney（シドニー）や Lucan（ルーカン）のやうに、短命に終つた多くの人達に迎へられることだらう。

シェリーの形面上學的思索は、巧みに又た極めて自然に、此の詩の終りの方に示されて居る、彼は決して無神論者でも、唯物論者でもなく、靈魂の不滅を信じた者である。彼は考へた。生きた我等は、現象の本體を認識し得ないものである。「生は殿堂にはめた色硝子に似て、死して之を踏み破

る迄は、久遠の純白なる光輝を汚すものである。」故に人は己れの求むる所を得んと欲せば、死して凡べての往く所に往かなければならない。死は肉に囚はれたる靈の解放である。死せる者は、その肉眼を掩うた幕を擧げて、眞と美と理想とを認めることが出來る。彼は認識學上の觀念論を信じた者であつた。又た此の篇の最後に於いて、シェリーは、彼に先立つて死んだ青年詩人の跡を追うて、やがて天上に相會ふことだらうといふ感じを述べて居るが、果してその翌年に亡くなつたのは、不思議といはばいふべきであらう。

I am borne darkly, fearfully, afar;
Whilst, burning through the inmost veil of Heaven
The soul of Adonais, like a star,
Beams from the abode where the Eternal are.

暗の中を恐る々々私は遠き彼方へ連れられて行く。
その時天の奥深い帷のかげに、
アドネースの魂が、
神のまします處から、星のやうに光つて居る。

却説前述の通り、シェリーは觀念論者であつたから、我々の感覺は不完全で、眞理を認識することが出來ぬと說く者である。即ち「過失●無智●爭鬪の世に、實在のものとてはなく、凡べては現象で、吾人は夢の影に過ぎないものである。死そのものは、凡べて他のものと同樣、一種の虛僞なりと告白するのは、穩當の信條でもあれば、又たかく考へるのが愉快なことである。」

In this life
Of error, ignorance, and strife,
Where nothing is, but all things seem,
And we the shadows of the dream,

It is a modest creed, and yet
Pleasant if one considers it
To own that death itself must be,
Like all the rest, a mockery.

The Sensitive Plant ll. 122—29

然るにこの迷夢の世から目覺めたものは、初めて十分に「愛と美と喜と」を認めて、眞の生活に入るわけであるが、斯かる人は、我等の經驗の範圍外に在るが故に、最早生存しないものと考へられるけれども、如何なるものも決して消滅することはなく、久遠の一部となるものである。「何となれば愛と美と喜とには、死もなく變化もない。此等の力は、自體が暗冥にして、光明に堪へ得ない我等の官能に勝れるが故である。」

For love, and beauty, and delight,
There is no death nor change: their might
Exceeds our organs, which endure
No light, being themselves obscure.

ditto ll. 134—37.

彼は、靈魂不滅の信仰が、吾人の慾求より來たことを論じて居る。

「自然科學者は更に、死といふ事件の爲めに、凡べての人が共通に受ける感動によつて、死には思想●感情の絶滅が伴ふことを、一層確實に見られる

ものと信じて居る。(中略)然しながら智識及び生活の本原は、最も著しく且つ根本的に、有ゆる他の既知の物質と異り、又た物質は凡べて、相互に類似點を持つて居るが、この本原は、全く之に關係のないことを考へて見よう。斯うした承認が、本原不滅の議論に、どうして成り得よう。我等の見る所知る所のものは、消滅又たは變化する。生命と思想とは、成る程外のものとは違ふ。若しその存在を經驗し得ない時代を經て、此等が生き殘つて行かなければ、かゝる差別・相違が、何等證明の影だに與へない。そして我等の慾求を措いて、他に我等をして斯く想像せしむるものは無いであらう。」

(Essay on a Future State.)

第二章に於いて、ヘレンの良人ライオネルは、シエリー自らを描いたのだと述べて置いたが、ライオネルは死の手が彼に加へられようとした時に、その作者と同じ信仰を抱いて居たのである。ナイティンゲールに耳を傾けなから、彼はヘレンにいふ。

Heardest thou not sweet words among
That heaven-resounding minstrelsy?
Heardest thou not, that those who die
Awake in a world of ecstasy?

Rosalind and Helen ll. 1121—24

天にも響くあの樂人の、
優しい言葉が聞えぬか。
死んで行く人は喜の世に、
目覺めるといふことが聞えぬか。

さて本論に歸る。アドネースは、キーツよりも寧ろシェリー自らを吊ふ歌であるが、彼の天才が立派に成熟した時代の傑作で、作者の内部に活が、十分の創意を以つて表現せられて居る。彼の哲學、彼の信仰が、自由に驅使した言葉に織り込まれて居る。そして彼の書簡に散見する、彼自らの批評に勝る批許とては有るまいと思はれる

「私は此頃キーツを吊ふ詩を作つて居ますが、それはやがて完結するでせう。あなたは、それを理解して興味を覺える少數の一人として、私の朗讀を聽いて頂く積りです。それは立派な藝術品です。その出來ばえは、私の如何なる作品にも勝れて居ることゝ思ひます」(ヂスボーン夫妻へ。一八二一年六月五日)

「私は特にアドネースの運命が聞き度いものです。若しあの詩が永久に葬られて終ふならば、實は驚かざるを得ないのです」(出版者オリアーへ、一八二二年十一月十一日)

「あなたはアドネースと、多分はヘラスを御覽になつたでせう。その題は兎に角、前者の出來ばえは、必ずしも御氣に召さぬことはないでせう。」(ピーコックへ。一八二二年一月十一日)

又たキーツの評論家を呪うた句に就いては、かういつて居る。

「彼を殺した人の爲めには、一切を燒きつくす火の中に、私のペンを浸しました　其の他の點は落着きのある重々しいスタイルです。」(ヂョン・ヂスボーンへ。一八二一年六月廿一日)

シェリーの抒情詩は、暗に捨てられた人の子の泣聲が、夜半に目覺めた枕元に、悲しいリズムを傳へて來るのに喩へようか。そのあはれな餘韻が、

ありし昔の記憶を喚んで、堪へがたき思に、讀む人の心の古い傷が再びうづく。我等の古き哀愁を新にする力あるもの、これぞ眞の詩歌である。彼の詩を讀むものが、さうした情緒を再び經驗しないで居られようか。彼の詩には彼の魂が宿つて居る。彼の上品な若々しい顏や、あの明るい眸が、夢のやうな詩の國に遊ぶ讀者の心に浮んで來る。彼の詩を繙くことは、俗界の蕪雜な刺戟に汚れた頭を、曉の露に清め、穢土の塵に塗みれた手を、澄める泉に浸しながら、一切の慾念を離れて、星界の音樂に聞き惚れることである。

欠

秋の朝夕に、
黄金の霧がかゝるとき。

私は雪と、
かゞやく霜が好きだ。
波と風とあらしと、
凡べて「自然」の、
人の憂目に
汚れぬものが好きだ。

彼がクヰン●マブを創作した當時（二十歳）までは、苦しめる者、虐げられた者に同情して、自然や風景を顧なかつた。抒情詩人及び自然詩人として

欠

のシエリーは、社會改造論者及び人道主義者としてのシエリーから生れ出たものである。文人としてのシエリーは、幼稚なローマンスの作者を振出しに、クヰン・マブを出す迄は、別に目ぼしい作詩とてはない。彼が大學を退學になつて、ハリエットと結婚するまで、一時北ウェールズ(ノース)に居たことがあつたが、その美しい山の景色も、別に彼の注意を惹かなかつた。勿論無意識的にはその影響を受けたには相違ないが。

彼がダブリンに政治運動を試みた後、妻とその姉を引き連れて、再び北ウェールズを放浪し、風光の美を以つて聞えたDevonshire(デヴォンシヤー)のLynmouth(リンマス)に滯在した。此の地方に於ける山水の美は、深き印象を彼に與へ、初めて詩興が胸中に動いた。海岸の岩に波の碎ける音樂の響、雲の爲めに斷えず變化する山の姿は、多感なる彼の精神を魅了し、常に多種多樣の美觀を呈する海や空の眺望は、少からず彼の想像を刺戟した。この海岸の風景は、彼に鮮かな印象を燒き付けたものと見えて、友人ホッグの傳にはかう書いてある。

「この繪のやうな谷間の景色は、彼の記憶に、拭ふべからざる印象を殘した。それは强くもあれば、更に永續的でもあつた。彼の餘りに短い生涯を通じて、而かも悲慘な最後の時迄も、彼の習慣として、殆んど無意識的にペンを以つて、本の表紙裏の白紙や、手紙の裏やノートブックに、時には壁や腰板に、或は岩や崖の頭や尖に、この魔力を持つた場所の記憶や思出の、スケッチや樂書をやつた」(三四九頁)

更に彼は湖畔詩人(レークポーエツ)を讀むに至りて、益々自然の愛に引き入れられた。シエリー夫人はいふ、「彼は英國の古代詩を殆んど知らなかつた。Wordsworth(ワーズワース)

の發達せしめた自然の愛と智識――Coleridge（コールリッヂ）の詩の、高い調子や床しい美――Southey（サウジー）の空想を縱にした喩（イマヂエリー）象や、目も覺める風景が、彼の愛讀の主なるものであつた。……彼がクヰン●マブを書いた當時は、イングランド●スコットランド●アイルランドを縱横に旅行し、最も風光の明媚な處に、月日を送つたのであつた。山と湖と森とは、彼のホームであり、自然現象、は、彼の好んで研究する所であつた。彼はその原因を討究せんと欲して、娯樂の程度で、物理や化學の實驗に耽つた。恁うした趣味は、彼の詩文に眞實と生命とを與へ、絶えず自然に接觸して、その驚異を嘆美したことは、彼の魂を溫くしたのであつた」（クヰン●マブの註）

茲に引用した夫人の説明の通り、彼はその放浪時代に於いてCumberland（カンバーランド）のKeswick（ケジク）に滯在したことがあつた。彼が此處に來たのは、風光の美を以て知られて居たよりも、寧ろザイオン●ハウス學院以來の愛讀詩人サウジーが居たからであつた。彼の手紙の一節には、「此處の景色は馬鹿に綺麗です。……然し最も興味深く感ぜしめるものは、サウジーの居ることです。彼は今旅行中ですが、歸つたら訪ねませう。」とある（一八一一年十一月十四日）

クリスマスも近づいた頃、此の二詩人は初めて相會うた。十九歳のシェリーは、自由●平等●博愛の黃金時代を描いた理想家で、十八歳も年長のサウジーは、その若い時の理想も希望も、既に落着いた色調を帶びて居た。サウジーはその時、「彼（シェリー）は正しく一七九四年（二十歳）の私だ」といつた。

サウジーは、彼の爲め種々の便宜を取計らひ、色々の書物を貸したり、家賃値下げまで交渉してやつた。シェリーはサウジーの人格を敬慕し、詩

人として又た思想家としてひたすら推服するの外はなかつたのであるが、忽ちにして例の幻滅が來た。彼は以前の通りサウジーを貴く考へなくなつた。世の惡習に染みて、墮落したものと思ふやうになつた。さればサウジーその人が、彼には何等の影響を及ぼしては居ないのである。

却説シェリーの自然に對する愛は、かうして自國の風景に啓發せられたが、彼の伊太利亡命中と雖も、恐らく之を忘れることは無つたであらう。彼はヘレンをして繪のやうなコモ湖畔に、かうした思を語らせて居る。

Talk with me
Of that our land, whose wilds and floods,
Barren and dark although they be,
Were dearer than these chestnut woods.
Rosalind and Helen ll. 20—23.

「鄕國の話を致しませう。
縱令その野や川が、
いくら瘠せて暗くとも、
この栗の樹の森よりも懷かしい。」

一八一四年シェリーは、メーリとクラヽとを連れて、瑞西に赴き、その翌々年再び三人連れで、ヂェネヴァに夏を過ごしたのであつた。瑞西の美しい山水が、益々彼をして自然の美に目覺めしめたことはいふまでもなく、彼の詩歌や書簡にも、彼の感激があり〳〵と見える。彼はヂェネヴァ湖畔に一軒の家を借りた。彼はボートに横りながら、靜かに行雲を詠め、或は岸を泳ふ小波の音に耳をすまし、後は山の端出づる蒼白い月に見惚れ、或は湖心にうつる星の影を數へた。「晴れても曇つても、たゞ舟の中で過ごした

日數が多かつた。風のまに〳〵に舟を走らせ、或は靜かな波に乘つてゆら〳〵させた。自然の神々しい姿は、其の後彼が詩歌に織り込んだやうな思想を授けて呉れた。彼の「アルヴ橋畔の詩」(Lines on the Bridge of the Arve)や、「智識の美を欲する歌」は、此當時の作である(シェリー夫人、「イスラムの叛亂」の註)

彼はバイロンと共に、湖上を一周し、心ゆくまで自然美を味つたことは、七月十二日附(一八一六年)で、ピーコックに送つた書簡にその委曲を盡くして居る。彼が如何ばかり瑞西の山水に旅の氣分を味ひ、彼の詩囊を肥やしたかを知るために、その長い手紙の一節を引用しよう。

「Hermance(ヘルマンス)を出發して、日沒に Herni(エルニ)の村に着いた。隱氣な汚ない宿を見てから、湖水の岸へ歩いて行きました。夕燒のもやのかゝつた、廣濶な水の面に、傾斜した水際に近く、岩の多い島々の點綴したのを見るのは、好い景色でありました。又た澤山の魚類が游いで居て、岩に止つて居る羽虫を喰ひに、夥しく集つて來たのです。

「宿へ歸ると、室は片付いて、先きの不快な樣子も、大方無くなつてゐました。この宿屋を見て、私の友達(バイロン)は希臘の旅を思出し、こんなベッドに眠るのは、これで五年振りだと申しました。かうした思出が私共の話をはづませたが、それも次第に興が醒めると、私は自分の室へ退きました。明日の旅の事や、歸つてからの旅物語の事を考へると、決して不快な感じはしなかつたのです。」

彼は可愛い高山植物に魅せられた。同じくピーコックへかう書いた。

「私の買物の中で最も趣味のあるのは、珍しい高山植物の種を澤山に集

めたものです。その包紙には、それ〴〵名前が書いてあります。之を故郷の庭園に移植する積りですが、貴君にも、どれなりともお好きなものを選ばせて上げませう。」

彼は嘗て Chamouni（シヤムーニ）の谷を通り、Arve（アルヴ）の橋の畔りに佇みながら、その雄大な景色を詠め入つた折の感想が、Mont（モン） Blanc（ブラン）と題した詩となつた。彼が初めてこの峻峰を見た時の印象は、彼の書簡に殘されて居る。

「モン・ブランは我々の前にありましたが、雲に掩はれて居たのです。恐ろしい谷の、幾條となく喰込んだ裾の方が、高く見えて居りました。モン・ブランに連つた山脈の一部は、見向きも出來ない程に、かゞやく雪の尖塔の如く、高い雲間に折々光つて見えたのです。私はこれまで、山とはどんなものか、知りもせず想像もしなかつたのです。このやうに高く聳えたすばらしい峯が、突然我々の眼界に現れた時には、歡極つて、狂喜に近い一種の驚異を喚起すものです。そしてこれは一つのまとまつた場面として、我々の注意と想像とに、深く喰入つて終ひました。」（ピーコックへ。一八一六年七月廿二日）

一八一六年の秋には、Windsor（ヴィンツアー）の森が、折からの霜に照りそめた時、この美しい國を旅して養うた詩想は、その前々年の旅の印象と結び村いて、之に過去の經驗の解釋を加へ、長篇アラスターに美しく現れた。此の詩は先づ「自然」に對する著者の祈願に始まる。彼の魂には敬虔の念が染み込んで、自然を愛するやうになつた次第を述べていふには、

Mother of this unfathomable world!
Favour my solemn song, for I have loved

Thee ever, and thee only; I hanc watched
Thy shadow, and the darkness of thy steps,
And my heart ever gazes on the depth
Of thy deep mysteries.

「測りがたき此の世の母よ。
私に眞面目な歌をめぐみ給へ。
私は常にあなたを愛した。
あなたの影を、暗い歩みを見つめ、
心の眼はあなたの深い
神秘の淵を眺めて居る」

彼が物凄いコーカサスの、荒寥たる山水を描いたあたりは、その筆致がいかにも雄大豪岩で、李白の蜀道難を讀むやうな心地がする。

At midnight
The moon arose; and lo! the ethereal cliffs
Of Caucasus, whose icy summits shone
Among the stars like sunlight, and around
Whose caverned base the whirlpools and the waves
Bursting and eddying irresistibly
Rage and resound for ever. ll. 352—57

眞夜中に月が昇る。
見よ魔のやうなコーカサスの崖を。
氷の峯は星の間に、
日の光の如くかがやき、
洞多き裾をめぐりて、

泡と波とは逆巻き狂ひ、
絶えず響を傳へて居る。
晝なほ暗い森の景色は、素より彼の想像の生んだものではあるが、情意を備へた動物の如く植物を取扱つてあるのは、「ねむり草」(The Sensitive Plant) のやうに、彼の唯心論的自然觀を現したものである。

More dark
And dark the shades accumulate. The oak,
Expanding its immense and knotty arms,
Embraces the light beech. The pyramids
Of the tall cedar overarching, frame
Most solemn domes within, and far below,
Like clouds suspended in an emerald sky,

The ash and the acacia floating hang
Tremulons and pale. Like restless serpents, clothed
In rainbow and in fire, the Parasites
Starred with ten thousand blossoms flow around
The grey trunks, and, as gamesome infants' eyes,
With gentle meanings, and most innocent wiles,
Fold their beams round the hearts of those that love,
These twine their tendrils with the wedded boughs
Uniting their close union. ll. 430—45.

影はいよ〳〵暗うなる。
樫は節くれた太い腕をひろげて、
しなやかな山毛欅を抱へる。
脊高い杉の三角塔は、

その内側が嚴かな丸天井をなし、
遙か下の方では、青空に懸つた雲のやうに、
とねりこやアカシヤが、蒼うゆら〳〵垂れて居る。
虹と火とに包まれてうごめく蛇のやうな寄生木は、
萬の花が星ときらめいて、
古い幹のまはりに流れ、
ざれる小供のまなざしが、
やさしい無邪氣ないたづらで、
己れを愛する人の心に、
ゑみと光をもたらすやうに、
末永う契つた枝につるをまいた。」

一八一八年(廿六歳)の三月十一日は、シェリーが伊太利へ鹿島立ちの日であつた。その日とその翌朝とが、懐つかしい故國の空を見た最後の日となつた。これには色々の事情がある。

一八一七年一月八日、先妻ハリエットの父ウェストブルックは、ハリエットの生んだ二人の孫(女兒(アイアンシ)と男兒(チャールズ))に對する、シェリーの親權喪失を、時の大法官エルドン卿(Lord Eldon)に告訴した。その理由とする所を見るに、シェリーは、三年間妻を遺棄し、「政治的正義」の著者の娘メーリ●ゴッドウィンと、違法にも同棲し、その間二兒は原告が之を扶養した。今日二兒の引渡しを請求する父は、自ら無神論者と稱し、クヰン●マブ及び其の他の著述を出版して、基督教の教義を嘲り、神の存在を否定する者であるといふに在る。勿論シェリーも之に對抗して、堂々とその主張を開陳したが、三月

廿七日、エルドン卿は、原告に味方して、其の二兒を Dr. Hume（ドクタ、ヒユーム）なる人に托して教育し、シェリーは年額二百磅の養育料を支拂ふべきものと判決した。彼の二兒が奪れた時に、彼の感じた苦痛は、言葉で之を表はすことは出來なかつた」と、シェリー夫人は、一八一七年の詩の註に書いて居る。その時彼は、メーリとの間に生れた男兒ウィリアムすらも、或は二人の手から奪はれはしまいかと心配した。そこで「ウィリアム・シェリーに與ふ」(To William Shelley) と題した一篇の詩を書いて、大法官を呪うたが、それには火のやうな憤りと、やさしい父の情が、あり〳〵と現れて居る。彼はウィリアムに向つて、縱令波風荒くとも、舟路を恐れる要はない。やがて親子三人は「青々とした海のほとりに住まう。それはうら〳〵かな黃金の國の伊太利か、自由の母なる希臘の國か」といふ。

We soon shall dwell by the azure sea
Of serene and golden Italy,
Or Greece, the Mother of the free.

又た此の詩の第二聯は、「ロザリンドとヘレン」に、一字一句も改めないで、その儘引用してある。(八九六——九〇〇行) 同じくエルドン卿を呪咀した「大法官に與ふ」(To the Lord Chancellor) といふ詩もある。

かうした昂奮に加へるに、創作に苦心慘憺したシェリーは、少からず健康を害し、その年の秋には妻の目にも餘る程衰へた。この時シェリー一家は、マーローに居住して居たが、醫師は休息と轉地とを妻に勸告した。そこでシェリーは、その冬を暖かなピザに過したならば、確かに自分の苦惱も癒えることゝ考へた。それのみか妻の姉クラ〻が生んだ女の兒を、その

當時ヴェニスに居つた父バイロンに引渡したかつた。

十二月七日付で、シェリーが妻の父に送つた手紙によれば、重い神經衰弱に惱み、その上肺病の徵候を自覺したので、斷然伊太利へ轉地する決心をしたのである。彼は佛蘭西●瑞西を經て、ミランへ出たのであるが、三月廿六日リオンからハントへ送つた手紙によると、風は暖かに、日はうらゝかに照つて、南の青い空は、少からず彼の元氣を恢復したやうである。彼はその途中に見たアルプスの谷を說明していふには、「その景色は、エスキラスのプロメシュースに描いた所と相似て居る。花崗岩の絕壁には、巨大な裂目や洞穴が見え、冬の山は、氷と雪とを戴いて居る。雲は洞中の隱れた水の響を傳へ、そゝり立つ巖の壁は、エスキラスのいふ通り、大洋の水神が用ゐる、翼をつけた車によらなければ、攀ぢのぼることは出來ない。」

(日記、三月廿六日)。彼はこの所見を回想して、自分の作に應用し、ヂュピターに虐げられたプロメシュースは、「鷲もひるむ山の崖に釘づけとなつた。それは冬枯れのやうな黑い色の、測り知れぬ高い山で、草も虫も獸も、扨は又た命あるものゝ音も姿もなかつた。」

Nailed to this wall of eagle-baffling mountain,
Black, wintry, dead, unmeasured; without herb,
Insect, or beast, or shope or sound of life.
Act I ll. 20—2.

伊太利に於いては、Symonds(サイモンヅ) もいふ通り、「僅かに四年の命しかなかつた。それは英語の存續する限り、微妙に響く音樂に滿ちた歲月であつた。」而かも自然詩人としてのシェリーは、此の間に大成したのであつた。彼は

又た伊太利文學の影響をも受けて居る。彼は Dante を愛誦し、Cary の英譯に慊らず、自ら之を terza rima に譯しかけたこともあつた。ダンテの詩風に負ふ所の多い作品は、「皇子アサナス」、「西風に寄する歌」Ode to the West Wind、「樵夫とナイティンゲール」The Woodman and the Nightingale 及び「人生の勝利」The Triumph of Life 等である。特に最後の作品は、(第五章參照)最もよくダンテの風格を傳へたもので、その內容は Petrarch の Trionfi(Triumph)に負ふ所が少くない。又た「チェンチ」に現れた宗教的情操は飽く迄伊太利風で、シェリー自ら之を說明していふには、「伊太利に於ける宗教は、新教團に於けるがやうに、特定の日に着る外套のやうなものではない。……それは人生の全組織中に織り込まれて居る。」さればこの悲劇全體に溢れて居る氣分は、自ら伊太利風ならざるを得ない。

却說一行はコモ湖畔に家を借りたかつた。その風光は特にシェリーを滿足せしめたものと見える。「Killarney(愛蘭の湖)の樹木の茂つた島々を除いては、これ程美しい湖を見たことはありません。それは細長くて、山や森の間をくねる大きな河のやうであります。私どもはコモの町から Tremazina といふ地方まで舟に乘つて、その邊の變つた景色を見ました。コモからその村へかけての山々は、いくつかの村の集りで、高い栗の森に掩はれて居ます。……然しこの岸の水際は、月桂樹や桃金孃や野生の無果花や橄欖樹が、岩の破れ目に生長し、洞穴の上に差し懸り、蔭を以つて深い谷を包んで居ると。そこには瀧が光つて居ます。その外花の咲いた灌木も色々生えて居りますが、私はその名を知りません。」(ピーコックへ、ミランにて、一八一八年四月二十日)この美しい抒景は、再び有聲の畫となつて、

「ロザリンドとヘレン」の巻頭に現れて來る。

その年の夏は、Bagni di Lucca に過ごした。日中は雷を催す雲が起つて、兎角天候が定らなかつたが、段々夕方になると、綿のやうな雲が靜かに動いて、日の入らないうちに消え失せた。この時彼は、妻とよく馬に乘つた。晝は急流に沿うた森の中で、四方は突立つた岩に圍まれ、一方から絶えず落ちて來る瀧壺につかつて居た。彼は先づ着物を脱いで、岩の上に腰を下ろし、Herodotus を讀みながら、汗の退くのを待つて、岩の上から、此の中へ飛び込んだ。

彼は、「感受性も想像も理解もない」伊太利人には失望した。然るに伊太利の自然は、彼にあざやかな印象を與へ、それが歴々詩中に現れて來る。伊太利の空や海、伊太利の山や水、伊太利の動物・植物は、彼の詩篇に生きて居る。「此處で私は、大氣の變化や、雷雨の起るのを見るのが好きなのです。それは折々眞晝の空を蔽うて、俄に始つて來るのですが、夕方になると、だん〳〵淡い雲となつて、無くなつて終ひます。螢も早く消えますが、南に當つて、森に掩はれた山のかひから、嚴かに昇つて來る木星と、折々空一面にかゞやき渡る、蒼白い夏の稻妻とがあります。疑ひもなく神樣は、螢が見えなくなつたその時に、低く空飛ぶ梟が、家路の見分けがつくやうに、かうした工夫をなされるのでせう。」(ヂスボーン夫妻へ、バニー・ディ・ルッカより。一八一八年七月十日)

彼はいつも戸外に居た。レグホーンの小徑を逍遙して、彼は告天子の歌を得たのであつた。バイロンとゴンドラに乘つて、彼が見惚れた日の入りは、そのまゝ「チェリアンとマッダロー」に描かれて居る。彼はフローレン

スに近い森の中を吹き拔けて來る烈しい西風の中に立つて、名高いオードが出來たのである。彼がプロメシュースを執筆中、赤くさした夕日を浴びて、あてもなく散歩をしてから、日が入つて星を戴いて歸ることになつて居つた。彼がピザに近い、San Giuliano の湯治場に滯在中、Monte San Pellegrino の頂上で、彼の想像を逞うしたあの不思議な「アトラスの妖女」が、胚胎したのであつた。

シェリーが伊太利に於ける最初の詩は、Bologna から遠からぬ山間の田舍宿で作られたもので、それは五月四日のことであつた。(一八一八年)「アペナインズの道」(A Passage of the Apenuines) が即ちそれである。その年の十月に出來た「ユーゲーニアン山間の詩」(Lines Written Among the Euganean Hills)には、地方色を見ることが出來る。Pompeii, Baiae, Vesuvius の印象は、彼の壯重な思想感情を盛つた「ネーブルスを頌する歌」(Ode to Naples—1820) に記錄せられて居る。その詩の最初の數行は、次の通りである。

I stood within the City disinterred;
And heard the autumnal leaves like light footfalls
Of spirits passing through the streets; and heard
The Mountain's slumberous voice at intervals
Thrill through those roofles halls.

あばかれた都の中に立ちて、
秋の木の葉の聲きけば、
街を通る亡靈の輕い足音のやう。

その山の眠むげな聲は、
屋根なき廣間に折ふしふるへる。

「あばかれたる都」ポムペイは、彼の想像をそゝり、かうした嚴かな一篇の詩が出來たのである。彼の「ねむり草」(The Sensitive Plant)には、「ゼーエーの波」(the waves of Baiae)、「ヴェスヴィアスの煙」(the smoke of Vesuvius)といふやうな句が、比喩として用ひてある。(III.II 3—4)

彼は永久の都羅馬を訪うて、その廢墟をおとづれたのであつた。或はColiseum(コリシューム)に昔の跡を忍び、扨ては「Concord(コンコード)の寺の大きな柱の間から、オライオンの光る」のを見た。彼は此等の遺跡を目のあたりに見て、座ろ懷舊の情に堪へず、「羅馬はまだ世界の都」と叫んだものゝ、「羅馬は滅びた。それは見分けもつかずくづれ累なつて居る。死なぬものとては、たゞ自然

のみ」と詠嘆した。

Rome has fallen, ye see it lying
Heaped in undistinguished ruin:
Nature is alone undying.
Rome and Nature, a fragment.

彼は伊太利の「類なき光榮ある美」に醉うて、その天才は圓熟の境に入り、「西風に寄する歌」(Ode to the West Wind)や、又はエピサイキディオンの如きは、若し彼が此の國に來なかつたならば、これ程の雄大●綺麗な筆つきで、これ程の情熱が盛られることはなかつたであらう。前者に於いては、青い地中海が繪のやうに、その魅惑的な姿を展げて來る、

Thou who didst waken from his summer dreams

The blue Mediterranean, where he lay,
Fulled by the coil of his crystalline streams,

Beside a pumice isle in Baiae's bay,
And saw in sleep old palaces and towers
Quivering within the wave's intenser day,

All overgrown with azure moss and flowers
So sweet, the sense faints picturing them!

お前は眞夏の夢から、
碧い地中海を醒してやつた。
それはベーヱーの灣に火山岩の島近う、
澄める流の渦に寢つかされて居た。
かうして眠りつ見てゐた古い宮や塔が、
烈しうゆれる陽が光の中にふるへながら、
青い苔や床しい花にみな蔽れてゐた。
これを思へば氣がうつとりと遠くなる。

後者に於いては、夢のやうな多島海の島が、イオニアの明るい空の下に漂着した樂園の如く、あざやかに浮び出た有樣は、「此の世紀(十九世紀)に於いて、押韻のヘロイック・メーター(heroic metre)で書いた、最も美しいものである」(サイモンズ)

The blue Ægean girds this chosen home,
With ever-changing sound and light and foam,

Kissing the sifted sands, and caverns hoar;
And all the winds wandering along the shore
Undulate with the undulating tide:
There are thick woods where sylvan forms abide;
And many a fountain, rivulet, and pond,
As clear as elemental diamond,
Or serene morning air, ll. 430—38.

青い多島海はこの選ばれたる我家をめぐり、
ひまなく變るひゞきと光と水泡、
それは細かいいさごと苔むした洞に吻づける。
岸邊にたゆたふなべての風は、
うねる潮につれてゆれる。

茂つた林に森の精が住み、
數多き泉と川と池とは、
純なダイヤやはれた朝風のやうに澄む。

斯うして描き出された美しい風景は、彼が自然を愛するの餘り、南歐の海と空とを、熱心に研究した結果である。これらの詩に現れた青い透明な空氣は、縱令想像に豐かな詩人といへども、常に北歐の暗い山容水態を見慣れたものには、倒底描き出すことが出來ない。彼は特に南歐の海を喜び、薫る風にゆれる波を見て、一切の憂苦を忘れたのである。「Spezzia（スペチア）の寂しい美しい灣では、彼の愛した波風が、彼の遊び友達であつた。彼はおほかた水の上で暮らした。ボートを操縱することや、又たそれを改造工夫することが、彼の主なる仕事であつた。夜になつて曇りなき月が、晴れた海上

を照らした時は、たゞ一人小舟に乘つて、海をめぐる巖窟に出掛け、その蔭に座りながら、彼の最後の作品「人生の勝利」(The Triumph of Life) を書いた」(一八二四年の詩の序)

彼の最後の作品のやうに、殆んど凡べての詩は、蒼空の下で書かれたものである。水の上で、岡の上で、或は森の中で、詩想の湧くがまゝに稿を起した「放たれたるプロメシュース」は、寂しい花の生えた羅馬の古跡で筆を執つた。チェンチの大部分は、屋上の物見臺で書かれ、「イスラムの叛亂」は、Bisham(ビシヤム) の森蔭に舟を浮べながら、或は特に風物の美しい近郊を歩きながら、想を練りつゝ記したものであつた。

シェリーは、穢土を厭離し、欣んで淨土を自然に求め、戀人のやうな熱情を以つて之を愛したが故に、自然も亦彼に對して冷酷●無情ではなかつたのである。唯心論を信じ、汎神論を奉じた彼は、自然を見ること、猶生命あるものゝ如く、植物は勿論のこと、土砂・岩石も亦た精神を備へるものと考へた。彼は先づ故國を旅行して、自然に對する心眼を開き、次いでアルプスや瑞西の山水に啓發せられ、遂に伊太利に於いて、自然詩人としての天才が、その絶頂に達した。シェリー夫人はいふ、「彼の一生は、自然の考察に、熱心なる研學に、或は慈愛の行爲に過ごされたのであつた。彼は高雅な學者で、且つ深遠な哲學者であつた。さほどの科學的智識を有しないで、自然の物象を觀察することの正確●廣博なる點に於いて、彼に及ぶものはなかつたのである。彼は有ゆる植物の名を知り、地上に生れた凡べてのものゝ歴史と習慣とに通じて居つた。彼は空の模樣を見て、誤りなく之を說明し、天地間の樣々な現象は、彼の心を滿たすに、奥妙なる情緒を以つてし

た。」(一八二四年の詩の序)

彼が自然を思ふことは、人類を思ふのと變りがない。わくら葉の落ちて、草木の凋む寂しい秋の眺には、やるせない思ひに、彼の心は抑へられたであらう。落葉の經帷子を身に纏ひ、死の床に横る「年」の最後を嘆いた歌は、

Come, months, come away,
From November to May,
In your saddest array;
Follow the bier
Of the dead old Year,
And like shadows watch by her sepulchre.

Autumn.

來れ月よ來れ。
悲しみ[illegible]を裝うて、

霜月[illegible]皐月まで。
死んだ年の
ひつぎを送り、
影のやうにその墓をもれ。

「ねむり草」(The Sensitive Plant)は、植物に對する彼の愛情を示す代表的の詩である。この詩は、妻の座敷に面した庭園に、おびたゞしく咲いた花を見て、インスパイアされたといふ話である。この詩中に、夏の女神が、花守となつて現れて來る。「エデンの園のエバのやうに、ゆかしい此處には「力」があつた。それはみ空の星を列べ給ひし神のやうに、凡べての花が寢ても醒めても、それらをしろしめすみ恵みとなつた。不思議な女の姿を支へた愛の心は伸びて、海の下に咲いた花のやうに、彼女の見目振舞となつ

た。彼女はひねもすこの花園の守りをした。」

There was a Power in this sweet place,
An Eve in this Eden; a ruling Grace,
Which to the flowers, did they waken or dream,
Was as God is to the starry scheme.

A Lady, the wonder of her kind,
Whose form was upborne by a lovely mind
Which, dilating, had moulded her mien and motion
Like a sea-flower unfolded beneath the ocean,

Tended the garden from worn to even. Part II.

シェリーは萬有の本源たる宇宙の本體、自然の靈の存在を信じ、美の靈(Spirit of Beauty)若しくは愛の靈(Spirit of Love)として、之を表現し、その具象化は即ち Asia(エーシア)で、プロメシューズの許に歸つて、新たに宇宙が生れたのである。「ねむり草」に於けるこの婦人(レーディー)も、同じくこの靈の權化で、慈愛をこめて育てた花は、目もあやに咲き揃うたのであつた。彼は宇宙の萬象悉く、愛の原理に支配せられ、植物と雖も、愛を感じるものと信じて居た。されば、「昔ねく感じる愛の靈のやうに、美しい園に春が來た。花も草も地の黑き胸の上に、冬の眠りの夢からさめた。」

And the Spring arose on the garden fair,
Like the Spirit of Love felt everywhere;
And each flower and herb on Earth's dark breast
Rose from the dreams of its wintry rest. Part I.

然るにその婦人は、秋の葉のまだ色づかぬうちに、此の世の人ではなくなつた。あるじを失うた花園は、枯れた葉、凋んだ花、腐ちた莖が無殘に累り合うた廢園となつて、さきには「葉から根まで」、彼女の愛を感じたねむり草も、「泣いた涙が、たゝむだ葉のまぶたにたまり、堅い脂となつて、萎れて終つた。」

彼は植物を取扱ふに、人間の感覺●感情に適用すべき語を用ふることは、敢へて珍しいことではない。色あせてしなびた菫は、彼の寂しい胸の上に、未だ暖みのある心を「喇り」、彼は嘆いても、もうそれは「氣息もしない。」(On a Faded Violet)。一八二二年の春まだ淺い頃、彼はピザに近い松林の間を逍遙して、あらしに「苦しめられた」、野の「巨人」を見た。(The Pine Forest of the Cascine near Pisa)彼が恁うした言葉を用ひたのは、彼が眞實に、かく感じかく思うたが故であつて、決して修辭の技巧を弄したものではない。

彼は菜食論を主張し(クヰン●マブ)、且つ之を實行した。隨つて彼は動物を愛し、蛇までも好きであつた。彼は告天子を鳥とは思はなかつた。「思想の光に隱れながら、自ら歌をうたふ詩人」か、「貴い生れの姫君が、戀を負うた心の慰めに、戀のやうにやさしい樂の音を、高殿の己が部屋に、ひゞかせて居る」ものと考へた。「訓戒」(An Exhortation)といふ彼の詩は、愛と譽とを生命とする詩人をば、光と風とを喰ふカメレオンに喩へてをる。この冷い地上に於ける詩人の生命は、海底の洞に、生れながらに隱れて居るカメレオンのやうなものだ。そこで彼は戒めていふ、「富と權力を以つて、詩人の自由な神のやうな心を汚すな。きらびやかなカメレオンも、光と風と

の外に、何か食物を攝つたならば、やがて蜥蜴のやうに俗なものになつて終はう。」

Yet dare not stain with wealth or power
A poet's free and heavenly mind:
If bright chameleons should devour
Any food but beams and wind,
They would grow as earthly soon
As their brother lizards are

彼は木の下闇に惱ましい歌の音色をひゞかせる、ナイティンゲールを嫌ふやうな、情を知らぬ柚人を呪うて居る。閉ぢた薔薇も青白い菫も、眠りながらその歌を聞いた。星を鏤めた大空も、闇につゝまれた大地の鈍い耳も、有ゆる風も花も鳥も獸も虫も、その優しい歌に聞き惚れたのであつた。然るにその柚人は、その鳥の音を耳にも入れず、「夕方には、大きな樹を屠る仕事をやめて、斧と鋸とを持つて歸つて行つた。自然のやさしい法則として、樹の魂はそれ〳〵森の女すだまであつた。彼女は自然の家の床や屋根を、常緑に淨めてゐた。」

And so this man returned with ax and saw
At evening close from killing the tall treen,
The soul of whom by Nature's gentle law
Was each a wood-nymph, and kept ever green
The pavement and the roof of the wild copse
The Woodman and the Nightingale. ll. 40—4.

最後に彼はいふ、「生あるものゝつどふ所から、愛のやさしい精を遂ひ、谷

間のナイティンゲールを困める、樵夫が此の世に多く居る。」

The world is full of Woodman who expel
Love's gentle Dryad from the haunts of life,
And vex the nightingales in every dell.

シェリーは、地水火風の原行に興味を持ち、特にこれらを詠じた詩歌が少くない。アトラスの妖女は火の美を理解して居つた。

While on her hearth lay blazing many a piece
Of sandal wood, rare gums, and cinnamon;
Men scarcely know how beautiful fire is—
Each flame of it is a precious stone
Dissolved in ever-moving light, and this
Belongs to each and all who gaze upon.

XXVII.

彼女の爐(いろり)には、
白檀・護謨・肉桂が、
焔を揚げて燃えて居る。
人は火の美しさを知らぬ、
焔はこれとはに動く光に融けた寶石、
これは凡べてそれを詠める人のもの。

彼の見た地球は、冷い固い天體ではなかつたのである。「放たれたるプロメシュース」の第四幕に於いて、星の光を受けて透明になつた地球は、その内に秘めた一切を明かにし、岩石も寶玉も礦石も、白熱の坩堝も大海を養ふ源も、手に取るやうに現れた。ヂュピターは奈落の底に沈み、プロメシュースは放たれ、暴虐の神に囚はれた地球の靈は、その時救はれて叫んだ。

The joy, the triumph, the delight, the madness!
The boundless, overflowing, bursting gladness,
The vaporous exultation not to be confined!

欣びと得意の狂亂、
限りなく溢れる歡喜、
包みきれぬ喜のもや。

シェリーは水を愛した。彼の短い半生は、水上に暮したものといつても過言でない。水の精は即ち Arethusa（アレスーサ）である。彼女は Elis（エリス）の森のニンフであつたのが、泉に姿を變へられて、跳ねつ滑りつ、躍りつ歌ひつ、心地よげに旅する無邪氣さを、大地もいとをしく思ひ、天も之を見てほゝゑんだ。その時川の神 Alpheus（アルフィーアス）は彼女を見初め、彼女の流れに己が流れを注がうとした。アレスーサは惡魔に追はれる心地して、命懸けに逃げたのであつたが、今にも後髪を握まれようとした時に、ダィアナの神に祈つて助を求め、海の神に命じて、此の身を隱くまはせ給へと叫んだ。騷がしい海も之を聞いて、その蒼い胸の奥まで感動し、彼女の願の通り、大海の水が二つに割れると、アレスーサはこの中に飛び込んで、大地の中をくゞり、シシリーの島に現れたが、執念深い川の神は、彼女を慕つて、此處まで跡を追うて來たのであつた。「この時二人の泉から、一つの川が流れ出た。エンナ（シ、リー）の山の、朝日さす一つの谷を下り、一度訣れた友達が、一つの心に融け合つたやうに、二人は水のなりはひをいそしむだ。山の櫂尾の洞にある、險しい床から朝日と共に起き出でゝ、晝は下手の森や、百合咲く野を流れ、夜はオーティヂア（島の名）の岸に近い、海上にゆられて眠る。今尙

愛しても此の世の命は盡きて、青空に上つた二つの魂のやうに。」

And now from their fountains
In Enna's mountains
Down one vale where the morning basks
Like friends once parted
Grown single-hearted,
They ply their watery tasks.
At sunrise they leap
From their cradles steep
In the cave of the shelving hill;
At noontide they flow
Through the woods below
And the meadows of Asphodel;
And at night they sleep
In the rocking deep
Beneath the Ortygian shore;—
Like spirits that lie
In the azure sky
When they love but live no more.

以上は「アレスーサ」と題した詩の梗概である。

蕭颯として吹く西の風は、恐ろしい秋の吐く息氣である。落葉●枯葉はあはたゞしう、魔法使の手から逃れる幽靈のやうで、黄や黒や青や、中には熱にうかされて、眞赤な顔で逃げて行く有樣は、疫病に取り憑かれたもの〻群ともいはうか、一面の野に山に、鮮かな色、すが〳〵しい香を漂はす春こそは、西風の緣を裝うた妹である。西風の流に乘つて、墨のやうな雲がむら〳〵と、空一面に廣がつて行く有樣は、空と海との縺れた枝から、

枯葉が夥しう散つたやう、或は恐ろしい魔女の髪のやうに、やがて來るあらしのたぶさが、地平線から高く中空に逆立つたのにも喩へよう。西風の過ぎる所は、碧い地中海も、靜かな夏の眠から目醒め、鏡のやうな太西洋も、自ら裂けて道が開ける。hear, Oh, hear! といふ疊句(リフレーン)には、飄々として吹く秋の風の聲が聞えてくる。この詩の頂點(クライマクス)に於いて、シェリーは天地の靈の如く、西風に訴へていふには、

Be Thou, spirit fierce,
My spirit! Be Thou one, impetous one!

Drive my dead thoughts over the universe
Like withered leaves to quicken a new birth!
And, by the incantation of this verse,

Scatter, as from an unextinguished hearth
Ashes and sparks, my words among mankind.

烈しい靈よ、お前は私の靈となれ！
強き者よ。お前は私となれ！
枯葉が散つて、新しい芽が萌えるやうに、
私の死んだ思想(かんが)を此の世の中にまき散らせ。
此の詩を呪文に唱へながら、
私の言葉を人類の間に、
消えぬ爐(いろり)の灰と火の粉のやうに吹き飛ばせ。

なほ參考までに、Lamartine(ラマルティーヌ)にもこれに似た句があるから、茲に掲げ

て置かう。

Quand la feuille des bois tombe dans prairie,
Le vent du soir s'élève et l'arrache aux vallons;
Et moi, je suis semblable à la feuille flétrie;
Emportez-moi comme elle, orageux aquilons.
hamartine: L'Isolement.

木の葉が牧場に落ちるとき、
宵風起りて谷間へ連れ行く。
かくて枯葉にも似たこの我を、
伴ひて去れ木枯よ。

此の詩に於いて、彼は先づ風を喚び雲を起し、遂には自分がその中心と

なつて、人類の爲めに、熱烈の氣を吐く所は、人生の戰場に於いて、人道の爲めに勇ましく戰はうとするチャンピオンが、大膽に挑む名乘りの聲である。彼の社會我も、彼の個人我も、自然に對する彼の感應も、悉くこの雄大な抒情詩に織り込まれて、激しい情熱が溢れて居る。私は今歐陽修の「秋聲賦」を讀んで見たが、これは讀書子の試みた、秋の氣の冷かな說明に過ぎない。この詩のやうに雄渾な氣魄が現れて居ない。シェリーは西風を客として、自分がその上に主となつたものである。そこに主觀が燃えて、自然を心の中に溶かして居る。

此の Ode to the West Wind は、一八一九年、「フローレンスに近い Arno（アルノー）河畔の森の中で書かれたものである。その日は烈しい風が吹いて、その生温い而かも昂奮的な溫度は、やがて秋の雨となつて落ちる蒸氣を集めて居

つた。果して夕暮には、雨と霰の劇しいあらしが起りて、伊太利特有の物凄い雷電を伴つた。」(シエリー夫人の註)

曩に述べた通り、シエリーは現世を遁れ避けて、大きな暖い自然の懐に隠れたけれども、この西風の詩にも見えるやうに、全く人生を忘れて終ふことは出來なかつた。彼は景に托して情を抒べ、機會あるごとに、人道主義の理想を宣傳する。さればこそ彼の最後の作品は、題して「人生の勝利」といつたのである。この點は同じく偉大なる自然詩人芭蕉と、大いに趣を異にする。最後の病床に在つた翁が、その弟子どもから辭世の句を望まれて、「昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世」と答へたのは、世の詩歌を弄ぶ者に對する頂門の一針で、彼は決して遊戯として十七字を連ねた者ではない。勿論彼は強ひて望まるゝまゝに、

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

の一句を遺したことは、誰も知る所である。彼は浮華淫蕩なる元祿時代の人間界を厭ひ、閑寂幽玄なる自然界に、安心立命を求めた者で、人としては極めて人情に厚かつたが、詩人としてはひたすら風雅の道に志して、天地●自然に同化したのである。彼は和歌の抒情的なるに反して、純然たる自然詩を發達せしめた。その「寂」といひ、「栞」といひ、「細身」といふも、要は形式●內容●渾然として調和し、閑寂なる境地を表現するに在る。彼は人事に殆んど興味を持たない。こは獨り芭蕉とシエリーとの相違のみならず、東西詩人の理想の相違である。されば東洋では古來、詩歌といへば、花鳥風月を主とし、西洋に於いては、人事を取扱つたドラマが發達したのである。

シェリーの自由奔放なる想像は、下界の事象を取扱ふのみで滿足が出來なかつた。彼の詩想は告天子のやうに、下界を離れて、高い〳〵天上に昇つて行く。彼の描いた月は、「天上の美しい媚婦(コケット)」で、「空を昇つて地上を眺める物うさに」、いつも蒼白い顏を見せて居る。彼の見た月は「死にかけた婦人が、蒼白う瘠せた顏を、紗のやうな覆面(ヴェール)につゝみ、己が部屋からよろめき出た」所であつた。(The Waning Moon. To the Moon. To the Moon, a fragment 參照)

太陽は即ち Apollo(アポロ) の神、その雄々しく勇ましい姿は、目も眩むやうな美男子である。星を織り込んだ帷を排し、黃金の車に召して、蒼窮を東より西に驅れば、雲は火に燃え、綠の土はその光に包まれる。彼は自然の眼で、詩歌・音樂・豫言・醫藥を司る。銀弓一度び鏘然として長鳴すれば、「夜を愛して晝を恐れる虛僞(いつはり)を殺」して終ふ

I feed the clouds, the rainbows, and the flowers
With their ethereal colours; the Moon's globe
And the pure stars in their eternal bowers
Are cinctured with my power as with a robe;
Whatever lamps on Earth or Heaven may shine
Are portions of our power, which is mine.

Hymn of Apollo.

雲と虹と花とに、
妙なる色を與へるものは我。
月の球と澄める星とはその常盤なる東屋に、
我が力を衣に着てきらめき、

天上地上のなべてのあかりは、
我が力のめぐみ。

自然現象の壯嚴な變化を取扱つた詩歌の中で、「雲」(The Cloud) は、最も雄渾なるものとして知られて居る。雲は慈悲の心を抱いた巨人である。彼は「渇いた花に、すが〳〵しい雨」を灑ぎ、「日盛りの夢を眠れる木の葉に、淡い影を」作つて呉れる。その巨人は戲れて歌うていふ。

I wield the flail of the lashing hail,
And whiten the green plains under,
And then again I dissolve it in rain,
And laughs as I pass in Thunder.

私は雹のからさを、
青い野原を白くする。
再びそれを雨で融き、
笑うて通れば雷となる。
然るに彼は、恐ろしい力を備へて居る。

I sift snow on the mountains below,
And their great pines groan aghast;
And all the night 'tis my pillow white,
While I sleep in the arms of the blast.
Sublime on the towers of my skiey bowers,
Lightning my pilot sits;
In a cavern under is fettered the Thunder,
Its struggles and howls at fits.

私が雪を山にふりかけると、
大きな松が驚きうめく。
私があらしの腕に眠るとき、
それはよすがら白い枕。
空の住家の高殿に、
案内の稲妻いかめしう、
下の洞につないだ雷が、
掻いて折々鳴きわめく。

註　第一行より第四行迄はアペナインズを抒したものである。

血のやうな朝日が、浮雲の後ろから飛び出して、燃えるやうな翼をひろげ、
眞夜中の月は、そよ吹く風に散らされた、綿毛のやうな雲の床を滑つて行く。然るに天候一度び惡化して、人の世を脅かすとき、彼の恐ろしい力が、思ふまゝに現れて來る。「渦卷く風が雲の旗を靡せば、火山も曇つて、星影はゆらめき、大海を渡つて橋のやうに、岬から岬へ、光も漏さぬ雲の屋根を掩へば、山々はその柱となる。空界の國々を征服した時に、雹と火と雪とを携へて、雲の進み行く凱旋門は虹である。」

かうした巨人は、飽くまで樂天的である。

I change, but I cannot die.
For after the rain when with never a stain,
The pavilion of heaven is bare,
And the winds and sunbeams with their convex gleams,
Build up the blue dome of air,
I silently laughs at my own cenotaph,

And out of the caverns of rain,
Like a child from the womb, like a ghost from the tomb,
I arise and unbuild it again.

姿はかへても私は死なぬ。
雨の後からきよらかな、
天の幕があらはれる。
風と光が中高う造る、
蒼い天蓋は私の記念。
それを默つて嘲りながら、
子供が母のからだから、幽靈が墓から出るやうに、
雨の洞から立出でゝ、

復もやそれをくづして終ふ。

此等の詩篇は、シェリーが無生物を人格化しようとする傾向を示したもので、彼は古の希臘人のやうに、地水火風を半人的に取扱はうとするが、アレスーサもアポロも、又た風も雲も、一定の力と性質を備へた精であつて、素より人格ではない。シェリーは、古の神話とは無關係に、これ等の現象を人格化して、その想像を滿足せしめた。子供のやうに、無邪氣なシェリーがこのやうな自然現象と戯れて、おもちやのやうに弄ぶ有樣は、最もよく彼の特徴を發揮したこの「雲」の詩にうかがはれる。彼は神話を喜び、自然の精靈が、色々と彼の詩中に具體化せられて居る。彼はこのやうに豊かな想像を持つの餘り、眼前の風景を描かないで、一旦自己の主觀の坩鍋を通過したものを寫さうとする。從つて彼の風景は、ワーヅワースの

それのやうに、明瞭な印象を與へない。彼のエピサイキディオンにあるやうな、空想の生んだ「常世の島」こそ、その最も代表的のものであらう。

さりながら彼は己が魂を自然に托し、自然を己が生命とし、自然に同化したものである。自然を說明する詩人はあらう　彼は自然そのものとなつた。彼の詩は即ち自然の聲である。自然を記述するに非ず、自然と生命を共にするものこそ、まことの自然詩人である。シェリーは西風となり、西風はシェリーとなつた。美しう咲き揃うた花園に、香ばしい春風が吹くのも束の間、やがて夏去り秋更けて、霜枯れの空に、見る影もなく朽ち行く「ねむり草」は、やがて我等の辿りつく運命を暗示するものではあるまいか。シェリーの詩を讀んで、告天子と共に、空想の世界を天翔り行くも、自然の聲に覺まされて、今更のやうに人生の儚きを悟り、天壤の悠久なるに驚くであらう。

第五章　最後のシェリー

シェリーの晩年は、彼の短い生涯の中で、最も幸福な時代であつた。一八二〇年の秋も闌けた頃、從兄弟 Thomas Medwin（トマス メドウイン）が、彼の招待に應じて、シェリー一家をピザに訪ねて來た。二人はザイオン●ハウス學院時代の友達で、その當時、「さまよへる猶太人」(The Wandering Jew) と題した、物語詩を思ひ付いて、メドウィンが提供した材料により、シェリーが筆を執つたことがあつた。メドウィンは其後軍籍に身を投じて、海軍大佐となり、孟買から歸つて、瑞西に滯在中、シェリーの手紙に接したのであつた。メドウィンはシェリーに再會した時の有樣を述べていふには、「我々が訣れてから、殆んど七年にもなるが、縱令人ごみの中でも、すぐ見分けがついたと

思ふ。彼は痩せた。又た近眼になつて、書物に觸れる程、眼を接近させる爲めに、やゝ前かゞみになつてゐた。まだ豐かな髮は、自然に縮れて、多少の白髮を交へて居た。彼は若々しい樣子をして、その顏付は、眞面目な時でも、昂奮した時でも、著しく智識的であつた。彼の容貌に現れた生々とした淸らかさは、遂に失はれなかつた。」この當時シェリーが沈んで居たことは、特にメドウィンの注意を惹いたものらしく、多少この間の消息を傳へるやうなローマンスが殘された。メドウィンの記す所によれば、ある年若い旣婚の英國婦人が、「まだシェリーの英國に居る間に、彼に烈しい戀を覺えた。そして彼の跡を慕うて、つきまとうて居たが、ネーブルス迄來て、其處で死んで終つた。」ブラウニングは、シェリーに、幻覺（ハルシネーション）の著しい傾向あることを述べて、この話を信じなかつた。「ウエールズに於いて、夜襲はれたといふのも、確かに迷想であつた。ネーブルス迄慕うて來た女も、ピザの郵便局で、彼を打つたといふ外套を着た男も、實は彼自らの、愛憎の心象から來たといふことは、この話の事情をば、多少研究した上で、私の確信を述べるのだ。」

ブラウニングのいふ通り、シェリーは成程幻覺を持つて居つた。彼がサウジーを訪ねるために、Keswick（ケジク）に滯在中、不景氣と失業との爲めに、その附近に强盜が出沒した。一月十九日の午後七時頃（一八一二年）、シェリーは怪しい物音に驚いて、玄關の扉を開くと、やにはに打倒されて、暫くは物心もなかつた。家主がこの騷ぎをきゝつけて、武器を持つて驅けつけた時には、兇漢は旣に居なかつた。又た一八二〇年ピザの郵便局で手紙を請求したとき、シェリーといふ名を聞いて、一人の暴漢が無神論者と罵つて

彼を打倒した。これ等の出來事が果して幻覺であつたか否やは、今日確證とてはないが、彼が死ぬ少し前のこと、夜中に飛起きて、恐ろしい悲鳴を揚げたので、一同がかけつけて見ると、自分の見た夢に驚いて、彼は意識を失つて居た。又たバイロンとクラ、との間に生れた、アレグラが死んでから、ある日のこと、海上に現れて、手を拍ちながら笑聲をあげて、彼に來いと手招ぎしたのを見たこともあつた。要するにかういふ性癖を持つたシエリーのことであるから、メドウィンのいふ所は、信を措き難い所もあるし、勿論確かな證據とてはない。一八一三年二月廿六日夜 ウエールズの Tremadoc に滯在中短銃を携へた兇漢に侵入せられ、之と搏闘したことは、多年疑問となつて居たが、シエリーが散歩の時、病羊を一思ひに射殺してやつたのを、その飼主が怨をはらしに來たものであつたことが明かにされた。

一八二二年の一月には、又た一人の新しい友達が現れた。それは Edward John Trelawny といふ三十歳（シエリーと同年）の青年であつた。彼は別に規則正しい學校教育を受けなかつたけれども、旅行家として見聞の範圍も廣く、且つ一種の見識を備へて、因襲的風習を嘲り、傳統的意見に囚はれず、獨特の性格を備へた活動家で、文學も理解した近代人であつた。彼は瑞西でメドウィンから、シエリーの話を聞き、且つシエリーやバイロンの詩を讀んで、態々伊太利へ二人の交際を求めに來たのであつた。彼は初めてシエリーに會つた印象を記していふには、「すばやく這入つて、娘のやうに赧くなつた細長い青年が、兩手を差出した。そのはにかむだ女のやうな無邪氣な顏を見て、それが詩人であつたとは、殆んど信じられなかつたが、私は彼の暖い握手を返へした。私は呆れて物がいへなかつた。このやさし

い無髯の少年が、本當に全世界を向うにまはして戰つて居る怪物であらうか。教會の長老からは破門せられ、嚴しい大法官の命に依つて、その公民權を奪はれ、親同胞からは見放され、文壇の敵からは、惡魔派の祖と罵られて居る。私はそれを信じられなかつた。それは虛言に相違ない。彼は子供のやうに、黑いヂャグツとヅボンを着けて居たが、それは彼の體が大きくなつて合はなくなつたのか、それとも、仕立屋がよくやるやうに、不都合にも切りつめた裁縫をしたものゝやうであつた。ウイリアムス夫人は私の當惑を見て、氣をきかしてシエリーに、その手に在る本は何かと尋ねた。

「Calderon（カルデロン）の「不思議の魔法使」（Magico（マヒコ） Prodigioso（プロディイヒオソ））。私は今これを飜譯してるのです」

「私共に讀んでお聞かせ下さいまし」

彼には興味のない平凡な事件の岸を離れて、得意の問題に乘り出したので、彼は書物の外の事は、一切忘れて終つた。彼は巧みに著者の天才を解剖し、明瞭にその話を解釋し、そしてこの西班牙詩人獨特の巧妙な章句を、何の苦もなく英語に譯したのは、如何にも驚くべきことであつたし、同時に彼の兩國語に堪能の程も窺はれる。かうして彼の特徴に觸れてから、最早私は、彼がシエリーであることを疑はなかつた。續いて全くの沈默がきた。顏をあげて私は尋ねた。

「何處へ往つたのでせう」

「誰？　シエリー？　あの方は幽靈のやうに來て、幽靈のやうに往つて終はれます。何時來たのか、何處へ往つたのか、誰れにも分りません」とウイリアムス夫人が答へた。

以上はテゥレローニの「追想錄」の一節である。この書物は、著者の伊太利に於ける、シェリー、バイロンとの交遊を抒べ、更にバイロンと希臘獨立戰爭に參加した思出を、一八五八年に出版したもので、文學●歷史の研究資料としても、亦た單に讀物としても、非常に興味の豐かなものである。悉しくは Recollections of the Last Days of Shelley and Byron と題し、此處に引用した個所は、牛津(オクスフォード)版一三——一四頁に在る。

「數人の親友」中に、Williams(ウィリアムス) 夫婦の在つたことも忘れてはならぬ。二人は立派な教養もあり、殊に深き同情を以つて、斷えずシェリーを慰めたのであつた。良人のエドワードは、シェリーと同じく、イートン出身で、メドウィンの勸めによつて、文學上の好奇心を滿足させる爲めに、シェリーと交際を求めに來たのである。ウィリアムスと試みた「愉快な回遊」の一つは、「セルキオ河上の舟遊」(Boat on the Serchio) に殘つて居る(第一章參照。「再び憂に沈んだシェリーも、この當時を樂しく靜かに休養した。セルキオの流れに漂うた彼の脆い舟に橫つて、山や水の上を滑つて行く雲の影を詠め居る時に、或は涼しい夕方に、繪のやうな河の上を、家路に向つて楫を取れば、ふくろは暗に鳴いて、螢が一つづゝ、枝を垂れた桃金孃(マートル)の間に、小さなあかりをともす時。彼には人生が夢のやうに思はれた。」(ウィリアム●シャープ——一七〇頁)。

この明るい氣分を現はした詩中の友人 Melchior(メルキオア) と Lionel(ライオネル) とは、それぞれウィリアムスとシェリーとを代表し、二人は愉快に舟を操縱して、この世の憂苦を忘れて居る。先づ夜明けに眺めた河の景色を抒べた所には、舟遊びに出掛けようとする詩人の幸福な氣持が窺はれる。二人はイートンの

昔を回想し、「笑ふ朝風」につれて、急流に舟を乘り出す。

彼は又たウィリアムスの妻 Jane（ジェーン）を愛し、數首の抒情詩を寄せて居るが、何れもその良人の手を經たもので、決して嫉妬を起さしめることは無かつたのである。メーリも良人の心持を理解して、ヂェーンと仲よく交際した。これ等の抒情詩は、彼の死んだ一八二二年の作で、To Jane : The Invitation（誘ひ）、To Jane : The Recollection（思出）、With a Guitar, to Jane（ギターを持ちて）等であるが、前きのエミリア●ヴィヴィアニに對する情緒は、今やヂェーンに向けられたことが分る。彼は理想の愛と美とを求めて、いつも地上の女に失望したが爲めに、彼の熱烈な憧憬は、常に同一の對象を以て滿足することが出來なかつた。勿論ヂェーンに對する熱情も、エミリアの場合に於けると同樣、精神的なプラトーニック●ラヴで、詩興を誘發するために、この婦人に對する感情を利用したものに過ぎない。彼女が「ねむり草」に出て來る婦人（レーディ）そつくりであることは、シェリーもハントに送つた手紙の中で述べて居るが、この詩はヂェーンと交際し始めた時より、一年ばかり前に作られたものであつた。

ヂェーンを歌つた詩の中で、最も可憐なものは、「ギターを持ちて」の一篇で、音樂に堪能であつた夫人へ、シェリーはその樂器を贈つたのであつた。彼女はシェリーの最後の住所であつた Lerici（レリチ）の高臺で、夏の夕べにそれを彈じた。メーリがハント夫人に與へた手紙によれば、彼女は「大變好い聲と、音樂に對する耳も趣味もあり」、竪琴が「彼女の愛用の樂器」であつた。

ある日のこと、テゥレローニがシェリーを尋ねて、松林の中にあつた池の

傍へ來ると、帽子や書物や紙が散らばつて、「強い光が、樹の間から流れて居た。水に根を洗はれた一本の松が、池の中へ倒れて、その下に詩人は殆んど體を隱すばかりに座つて居た。暗い鏡のやうな水を詠めて、思ひに沈んだ彼は、私の來たのを知らなかつた。」テゥレローニは詩人の夢を破らないやうに、樹の下にしやがみながら、そこにあつた書物を開いて見ると、一部はソフォクリーズ、他の一部は、沙翁であつた。その時テゥレローニは聲をかけると、『彼はふり向いて靜かに答へた。

「ヤア這入り給へ」

「これは君の書齋ですか」と私は尋ねた。

「さうです。これらの樹は僕の書物です。決して虚言をいはないよ」(中略)』

『彼はギターの詩を書いてゐた。私は紙を手に取つて見ると、たゞ始めの二行しか讀めなかつた。

Ariel to Miranda—Take
This slave of music

それは恐ろしく書き散らしてあつた。指で塗り消した言葉もあれば、字の上に又字を書いたり、幾行も幾行も、この上の亂雜はあるまいと感心した。かうしたなぐり書きは、ひとりよがりの藝術家が、天才の表明とかんちがひする。こんなことを彼に話したところが、彼は答へていふには、

「僕の頭が思想に熱せられると、やがてそれが沸騰して、とても掬ひきれない程速く、觀念や言葉をはね出して終ふ。朝になつて冷めた時に、君の所謂亂暴なスケッチを種に、改めて描き出さうとするのです。」(四七——

五〇頁)』

この詩は、その時シェリーが、沙翁の「あらし」(Tempest) を愛讀して居たことを示すもので、彼のヨットにも Ariel(エーリエル) といふ名を與へた。「思出」といふ詩には彼の悲觀的思想が、復たも頭をあげて、最後の句はかうなつて居る。

Though thou art ever fair and kind,
The forests ever green.
Less oft is peace in Shelley's mind,
Than calm in waters seen.

あなたはいつも美しく優しい、
森は綠の色をかへない。

水の面(おもて)が靜まらうとも、
シェリーの心に平和は來ない。

シェリーの生涯は、殊にその晩年に於いて、不思議にもバイロンと、色々のいきさつがあつた。二人の詩人が初めて近づきになつたのは、シェリーが二度目に瑞西へ旅行した時であつた。シェリーはバイロンの作品を讀んで居た。彼が中學時代にバイロンを精讀した證據は、二人の詩句の暗合で知られる。

Shades of the dead! have I not heard your voices
Rise on the night—rolling breath of the gale?
Byron's 'Lachine y Gair.' 1807.

Ghosts of the dead! have I not heard your yelling

Rise on the night-rolling breath of the blast?
Shelley's St. Irvyne. 1811.

又たバイロンもシエリーのクヰン●マブに感心して居た。そして何れも、社會の習慣●制度に反抗して起つた偶像破壞者であつた。シエリー自らは、バイロンを遙かに勝れたものと考へ、その前に出た時には、非常に卑下して居たので、積極的の影響を、その詩に受けることはなかつた。然しながら、バイロンの人格が、シエリーの人格に感化せられて、その德性を向上せしめたことは確かである。シエリーは、バイロンを買ひかぶつて、人としても詩人としても、實際より高く考へて居たことは、彼のアドネースを見れば分る。彼はバイロンを「永久の巡禮」に喩へ、「その譽は早くも不朽の記念碑となつて、生きた詩人のかうべを蔽ひ、己が歌の光芒を悲みに包んで」、キーツを吊ひに來たものと描いて居る。

The Pilgrim of Eternity, whose fame
Over his living head like Heaven is bent,
An early but enduring monument
Came, veiling all the lightnings of his song
In sorrow.

然るにバイロンは、キーツなど素より眼中になく、始めから馬鹿にして取合はなかつた。勿論バイロンは貴族であるし、キーツは、名もない馬車屋の倅で、學問もあまり無かつたのであるから、無理もない次第ではあるし、キーツの天才は、ハントやシエリーなどの友人丈けに認められたのではあるが、彼はドン●ヂュアンの中で(第十一章六十節)、キーツが僭越にも、希臘の古典が讀めないのに、その神々を詠じ、たつた一人の批評家の筆に

かゝつて、敢へなく死んだと嘲つて居る。又た Who Killed John Keats?（誰れがキーツを殺したか。――一八二一年七月作）といふ詩では、批評家を罵つた程、キーツに同情して居ない。

尤もシェリーと雖も、バイロンの缺點を全く見なかつた譯ではない。バイロンをモデルにした Maddalo（マッダロー）伯は、靈の力の頼み難く、死と共に我々の希望も消えるやうなことを述べたのは（Julian and Maddalo—ll. 120—30）、バイロンに靈的の欲求も、宗教的信念も認められなかつたことを、諷したものと思はれる。又たマッダローの子は、クララとの間に生れたアレグラを指すのである。

却説二人はヂェネヴァに於いて、一隻のボートを共有し、これによつて愉快に日を過ごすことが出來たのみならず、湖上に遠漕を試みたことは、前章に述べて置いた。歸來二人は、讀書と創作とに沒頭し、時々は談笑に夜の更けるのを知らなかつた。この時メーリは、怪談 Frankenstein（フランケンシュタイン）を書き出した。

シェリーが伊太利へ、アレグラとその母を連れて行つたのは、バイロンが二人を引取つて呉れるものと信じて居たからであつたが、絶えず新しい戀を漁るバイロンその人は、最早クラゝの事を忘れて居た。兎に角その娘を引取りはしたが、間もなくヴェニスの總領事 Hoppner（ホプナー）の妻に、その養育を委托した。クラゝが、母の懐を離れて他人の手に托せられた我が子の身の上を案じて居る有樣を、シェリーは一方ならず憐れに思うて、八月（一八一八年）の煎りつくやうな暑さを、馬車にゆられて、彼女をヴェニスに伴うた。其處で彼はバイロンに面會して、事情を話した處が、バイロンはア

レグラを愛しないと言つたのみならず、「クラ、がその子を連れて行きたければ、さうするがよい」と放言したので、シエリーは非常に憤り、その時から、大詩人として感服して居たほどに、彼を尊敬しなくなつた。その年の十二月二十二日に、彼がピーコックへ送つた書狀には、バイロンが最も惡い邪な病的精神を以つて、チヤイルド●ハロルドを書いたものだとこき卸し、現にバイロンが、とても普通の英國紳士が近づけないやうな、最下等の伊太利婦人どもを相手に、廢頽的生活を送つて居る旨を記して居る。これは明かに、バイロンに對する敬畏の念の薄らいだ證據である。

一八二一年の八月上旬、シエリーがピザに滯在中、バイロンの招きに應じて、Ravenna（ラヴェンナ）へ會ひに出掛けた。バイロンは、「ヴェニスに居つた時よりは、丸で反對の生活」をして居つた。尤もこの當時彼は、Guiccioli（ギッチオリ）伯夫人と、一種の關係を結んで居た。シエリーが其處に滯在中、ピーコックや、自分の妻に送つた書狀は、二人の生活狀態を明かにするものと思ふから、ここにその數節を引用して見よう。

「我々は夕方馬に乘つて、此の市と海との間にある松林を通拔ける。我々の生活法はかういふ風で、私もあまり苦しまずに、それに慣れて終つた。L●Bは二時に起きて、食事をする。二人は六時迄、話したり讀んだりする。それから馬に乘つて、八時に晩餐をたべる。食後午前の四時又たは五時迄話をして居る。私は十二時に起きる。そして私は今、彼が起きる迄の時間を、かうしてお前にやる手紙を書いて居る。

L●Bはあらゆる點に於いて、非常に進歩したものだ。天才●氣質●道德觀●健康●幸福に於いて、ギッチオリ伯夫人との關係は、彼に計り知られない

程の稗益があつた。彼は非常に贅澤な暮しをして居るが、一ヶ年四千磅といふ收入の範圍内であつて、その内百磅は、慈善事業の目的に使つて居る。……此處には二疋の猿と、五疋の猫と、八疋の犬と、十頭の馬とが居るが、馬を除いては、主人のやうに家中を歩いて居る。」(八月九日金曜日、夫人へ)

この手紙によるとバイロンは、離婚されたギッチオリ伯夫人の家に、いくつもの立派な部屋を持つて居つた。夫人は先夫から一ヶ年千二百クラウン(一クラウンは五志)の仕送りを受けてゐた。伯はその當時伊太利に於いて、屈指の金滿家であつた。

「二人は毎夕例の通り馬に乘つて、南瓜を的に、ピストルの練習をする。私の友人のやうに、段々狙ひが正しくなつて來たのは有りがたい。」水曜、夫人へ)

又た夫人への手紙に、バイロンのドン・ヂュアンを批評した一節がある。

「彼は未だ出版しない、ドン・ヂュアンの一章を讀んで聽かして呉れたが、驚くべき立派なものだ。それは現代のあらゆる詩人より高き、否遙かに高き位置に彼を据ゑる。そして一語一語に、不朽の烙印が押してある。私がバイロン卿に抗抗するのを斷念したのは、尤もな事でもあるし、又た外に競爭するだけの者も居らない。この章は、丸で第二章の終りのやうに、不思議な程、ゆつたりとして而かも力がある。飽くまで人性の尊嚴を主張する人も、抹殺したいと思ふやうな言葉が全くない。これは多年私が——當代には全然新しくて交渉もあり、且つ非常に美しいものを産み出すやうに唱道した所を、ある程度まで充たして居る。或は自惚れかも知れないが、全く目新しいものを創作するやうに、私が切に勸告した所を受け入れた痕

が見えるやうに思はれる。」

彼はバイロンに敬服するのあまり、かうして自他の判斷を過つて終つた。彼は自然バイロンに遠慮した。バイロンは其の當時自傳を書き終へて、之をムアに與へ、ムアはそれを Murray（マーレー）に二千磅で賣つた。就いてはかねてからハントの窮狀が氣がかりであつたシエリーは、バイロンにその話をしたが、助けてやつて呉れと賴んでも、斷はられることはあるまいと思ひながら、遂に切り出すことが出來なかつた。

Leigh Hunt（リー ハント）はシエリーの親友であつた。彼は當時の自由思想家で、又た詩人として批評家として、相當の位置を占めて居る。彼はゴッドウィンと同じやうに、絶えず貧乏をしてゐたが、一八二〇年の秋から、大病に惱んで、彼の經營して居た Examiner（エキザミナー）に執筆することが出來ず、之を廢刊すれば、一家の生計を支へることが出來なかつた。そこへ子供等が猖紅熱に罹る、娘の子がレウマチに苦む、赤ん坊が痙攣を起し勝ちといふ有樣で、ハント夫人も涙の乾く暇がなく、シエリーの妻に手紙を出して、一家族が伊太利へ移住の出來るやうに、何とか方法を講じて呉れと依賴をして置いた。

バイロンはシエリーから、こんな事情を聞かされて、色々相談の上、三人共同して雜誌（自由）The Liberal を發行するため、ハント一家を伊太利へ喚び寄せることに決めた。そこでバイロンは先づ、ピザに引移ることにして、愈九月一日に來着したので、シエリーも大變滿足した。再び彼はバイロンと共に、馬やピストルの練習をしたり、時にはアルノー河上に舟を浮べたこともあつた。テゥレローニの來たのも、恰度この時分であつた。

古今の詩人・哲人の著を蒐めて、彼の友人どもは、共々讀書をしたことが

あつた。彼等がゲーテの Faust（ファウスト）を讀んでゐた時に、バイロンはシェリーに、「蛇（スネーク）」といふ渾名をつけたが、これはシェリーが、目を光らして、音もなく動きまはる樣子をうまく現して居た。この頃のシェリーは、平穩な生活を送つたのであつた。「私共は例の通り、靜かに暮して居ます。私は早く起きます。少くとも眼だけは覺します。二時迄讀書又たは執筆。それから晝飯をたべて、Bを訪問し、天氣都合により、馬に乘るか、玉突をやります。夜は輕い讀物か、來訪者の相手をして過ごします。健康も段々よくなるし、苦勞も少くなつて來ました。」（ピーコックへ一八二二年一月十一日？）

併しこの二詩人は、必ずしも圓滿に交際したわけではない。シェリーは、同情のある誠實な心の持主で、常にアレグラを愛し、いたはつて居たので、その母親が切に引き留めたにも拘らず、バイロンが之を尼寺へ托した時に、その冷酷な處置を憤らずには居られなかつた。クラ、にその友人 Elizabeth（エリザベス）Parker（パーカー）が送つた手紙にかうある。「私はあの方（シェリー）が激したのを見たことは無つたのですが、昨晩は全く腹を立てゝ居られたのです。……シェリー夫人は Mountcashell（マウントカシエル）夫人に、彼はバイロン卿を打ちのめしてやりたかつたのだらうと申されました。あなたが御子樣の健康を氣づかはれるあまり、殆んど氣も狂ひさうだと、あの方が申されました時に、バイロン卿の顏には、人の惡い滿足の色が、ちらと見えたからです。」アレグラは元來虛弱な生れで、シェリーはその健康を氣づかふのあまり、自ら尼寺に訪ねたこともあつたが、遂に熱病に感染して、母の知らぬ間に死んで終つた。それはシェリーの死んだ約二ヶ月程前のことであつた。

テゥレローニがまだピザへ來ない前に、ウィリアムスから、ヨットを建造す

る計畫のあることを聞いて、米國のスクーナー型のモデルを持つて來た。そこでシェリーとウィリアムスとの爲めに、ヂェノアに於いて、長さ三十呎の舟を造らせることにした。素よりこれが、二人の命を奪はうとは、神ならぬ身の識る由もなかつたのである。二人の妻は笑ひながら、こんなことを言つた。「私共に相談もせず、同意も得ないで決めるんですね。私は何も申しませんが、このボートが嫌ひなんですよ。」ヂェーンがいふには、「私もさうなのです。だつて言つて見た處が駄目でせうし、たゞ二人の樂みを邪魔するだけの事ですから。」

シェリー夫人が、一八二二年の詩に付した註によれば、「彼がボートに熱中したのは、この時我々の友人に、數人の海員が居たからであつた。彼が好んで交際した Edward Ellerker Williams（エドワード エラカ ウイリアムス）は、第八輕騎聯隊附きで、元來は海軍出身であつた。印度に數年も居たし、冒險や男らしい運動を好んだのが、シェリーの趣味に一致した。そこで自ら操縦の出來るやうなボートを造り、海岸に居住して、隨時に何よりも好きな快樂を求めようといふのが、二人の目論見であつた。」

然しながら、彼が水を愛し、舟を好んだのは、少年時代からの事で、これが彼の娯樂でもあり、又た死の原因でもあつた。彼は水の在る所には、必ず舟を浮べようとした。彼がピザに滯在中、木框に防水布を張つた舟を造り、之をアルノーに浮べて乘つた。これを見た伊太利人は驚いて、命懸けの舟遊びが、どうして面白いのか、理解に苦しむだ。彼が住所を擇ぶには、水に近いといふことが、最も重要なる條件であつた。彼は泳ぎが出來なかつた。瑞西滯在中、バイロンと湖上を遠漕したことは、前章に述べて

置いたが、ある日のこと、風が次第に強くなり、浪が益々荒くなつて、今にも舟が覆らうとした。その時彼は從容として、靜かに運を天に任した。彼がピーコックへ書いた手紙にはかうある。「私の友達は、水泳の達人で、上衣を脱いで終ひました。私もさうして、めい〳〵腕を組みながら、今にも水舟になる覺悟でゐたのです。かうして死を前に見たとき、色々の感情が起つて來たのですが、勿論恐怖の情もあつたけれども、それが主なるものではなかつたのです。若し私が一人でゐたならば、さほど苦しく感じなかつたでせう。私は友達が、助けて呉れるだらうと思つて居ましたから、私を救ふために、彼の命が危いだらうと考へて、自分ながら耻づかしさに堪へられなかつたのです。」(一八一六年七月十二日)

彼は紙で造つた舟を、水に浮べながら、子供のやうに喜んでゐた。ある時は紙が無つたので、五十磅の紙幣で舟をつくり、之を Kensington Garden の池に浮べたことがあつた。オックスフォード在學の當時、ホッグと郊外を散歩する時は、池や流れを見付けると、必ず紙舟を投げ込んで、時の經つのも氣がつかず、ホッグが寒さと空腹との爲めに、もどかしがつて居るのを構はなかつた。こんな道樂が、彼の詩にも引合ひに出してある。シェリー自らを描いたライオネルは「やさしい兒で、やさしい遊びが好きであつた。小さな羽根の帆をかけた枯葉の舟に乘つて、あるか無きかのそよ風が、大理石のやうに靜かな水の面を亂すとき、彼の空想は泉の上を流れて行つた。」

He was a gentle boy
And in all gentle sports took joy;
Oft in a dry leaf for a boat,

With a small feather for a sail,
His fancy on that spring would float,
If some invisible breeze might stir
Its marble calm.
Rosalind and Helen. ll. 180—86.

又た「マリア・ジスボーンに與ふる書」(Letter to Maria Gisborne) にも、自らこの遊戯を回想して居る(七二——七五行參照)。

一八二二年の冬はピザに過した。春も更けて暑さが堪へ難くなつたので、五月一日には Spezzia(スペツチア) 灣に臨んだ家に移つた。シェリー一家と、ウイリアムス夫妻と、テゥレローニとは、同じ Casa Magni(カサ・マグニ) といふ家に棲んだ。これこそシェリーの最後の家で、Lerici(レリチ) の町に近く、險しい山が後ろに聳え、青い海が戸口まで寄せて來た。「なる程その景色は、思ひもよらぬほど美しいものであつた。青い海面(うみづら)は、殆んど陸に圍まれた灣となつて、近くはレリチの城が、東にそれを扼し、遠くは Venere(ヴェネレ) の港が、西にあたつて控えて居る。色々の姿をして、海岸にそゝり立つ岩の上を、こゞしい小徑がただ一すぢ、レリチの方へくねつて行く、その外に道とては無かつた。潮のない海は砂原も小石も殘さないで、たゞ Salvator Rosa(サルヴァートル・ローサ)(十七世紀伊太利のナポリ派の畫家) の風景畫に見るやうな繪をなしてゐた。」(シェリー夫人、一八二二年の詩の註)

色々の意味に於いて、シェリーは幸福であつた。彼はバイロンと訣れた。二人の間の感情は、既に融和を缺いて、曩のやうな親しい間柄ではなかつたのである。彼はいふ、「私はバイロン卿にはあまり會ひますまい。又たハントが二人の間に仲立ちとなるやうなことはさせません。私は一切の——

少くとも殆んど凡べての社交が嫌ひです。そしてバイロン卿は、そのいやなもの、うるさいものゝ中心です」(ヂョン●ヂスボーンへ。六月十八日)

この美しい又た寂しい景色は、少からず彼を滿足せしめた。ウィリアムスと毎日海上に游んで、健康も日益しに回復し、憂愁の氣分に閉されることも無くなつた。彼は又た西班牙の劇を讀み、或はウィリアムス夫人の音樂を聽き、たゞ夏の一日も長からんことを祈つてゐた。(六月二十九日附、Horatio Smith(ホレーショ スミス)宛書簡參照)

豫ねてピザに居た頃注文して置いた舟が、愈ヂェノアから到着した。シェリーは容易に出來上らないのを、非常に待遠うに思つて居たが、「五月十二日月曜日に來た。」彼の最後の詩「人生の勝利」(The Triumph of Life)は、大部分をこの舟の中で書いた。この詩は元來ピザで始めて、暫くそのまゝ捨てゝあつたのを、スペチアの海岸で、靜かに月日を送る間、心ゆく計り自然の美に醉うて、詩興が動きそめた頃、再び筆を執つたのであつた。最初の數節は、常に伊太利を愛し、その自然の精神を體得したシェリーが、雄渾な筆致を以つて、壯嚴な日の出を背景とし、險崖に横はる栗の樹に倚りながら、天上に輝く星と共に、夜もすがら思索に覺めた自己を描いて居る。

Before me fled
The night; behind me rose the day; the deep
Was at my feet, and Heaven above my head,—
When a strange trance over my fancy grew
Which was not slumber, for the shade it spread

Was so transparent that the scene came through
As clear as, when a veil of light is drawn
O'er evening hills, they glimmer.

私の前を夜は逃げた。
私の後ろに日は昇つた。
海は足許に天は頭上にあつた。
私の思は不思議にも、
眠ならぬ夢に掩はれた。
その蔭が明るく廣がつて、
曇りなくその場が現れたのは、
宵暗の岡に光の幕が引さまはされて、
ほのかに見えるやうであつた。
詩人の夢の中には、數限りもない群集が現れる。

All hasting onward, yet none seemed to know
Whither he went, or whence he came, or why
He made one of the multitude.

凡べては急ぎながら、
どこへ往くのかどこから來たのか、
なぜに仲間に這入つたのか、誰も知らないやうであつた。
堤を決した洪水のやうに、老いたるも若きも、男も女も、恐ろしいもの
から、逃げて行くものもあれば、他人の忌み嫌ふもを、搜し求めるもの
もある。何れも甲斐なき苦しみに疲れ、渴きに氣が遠くなつてゐても、逃

る泉の音も聞えないし、快く吹く朝風も感じないで、たゞもう生眞面目に、愚かな振舞を續けて行く。人生の兵車がきしつて來ると、それには澤山の捕虜が、鐵の鎖で縛られて居る。彼等は何れもこの世に名を知られた人達で、人生の誘惑に身を過つたのであつた。「その大勢の捕虜の中にも、後から續く口汚い群集の間にも、ソクラテスやキリストは居なかつた。」

Were there, of Athens, or Jerusalem,
Were neither mid the mighty captives seen,
Nor mid the ribald crowd that followed them.

革命の主唱者ルソーが出て來て、詩人の案内役をつとめる。顎を胸につけて、鎖にのせた兩手を組んだ人は誰かと尋ねると、あれこそ烈しい名譽心の子だ、彼は世界を征服しようとして、一度びその希望が破れると、この世に在らん限りの大きなものを失うたと答へる。それはナポレオンであつた。古今の英雄が後から〳〵と現れて、その風貌がまざ〳〵と見える。彼等は鬪うて敗れた。人生は常に彼等を征服した。彼等は人生の誘惑を受けて、何の甲斐もない戰に從事せずには居られなかつた。さりながら「然らば人生とは何ぞや」(Then, what is life?)といふ大問題は、そのまゝ解決されずに殘つて居る。又たシェリーの叫んだこの一句を最後の行として、遺憾ながら此の詩は完結しなかつた。

此の詩に於いて、シェリーの天才が、新しい方面に發達して居たのが窺はれる。彼は理想の人生と、現實の人生との間に、調和を求めようとして居たのである。彼の「放たれたるプロメシュース」は、人類と宇宙とが、遠き未來に解放せられるのを信じて、歡喜の聲を揚げたものである。彼のエ

ピサイキディオンは、地上に美の具象化を發見した感激の記錄である。然るに彼はこの「人生の勝利」に於いて、現實世界の生きた男女を取扱はうとした。從つてこの篇は、彼の天才が更に進歩の見込があつた證跡を示したものである。

六月の十九日には、嬉しい消息をシエリーは受取つた。一月程前にブリマスを出帆したハント一家は、遂にヂェノアの港に到着したのであつた。長い航海ではあつたが、ハント夫婦も別に弱つた樣子もなく、七人の子供等も至極元氣がよかつた。シエリーはヂェノアへ行かうと考へたが、或はレグホーンへ出帆した後になる心配があるので思ひ止つた。七月一日になつて、愈ハントがレグホーンへ向つたといふ通知を得た。殊にその日は西の順風が起つたので、シエリーはこの機を失はぬやう、新造のヨットを艤裝した。

この舟はテゥレローニが、ドン●ヂュアンと命名した時、シエリー夫婦は、別に反對をしなかつたけれども、二人は沙翁の「あらし」にちなむで、Ariel（エーリエル）と呼んでゐた。その當時メーリは病の床に在つた。彼女は六月にひどく健康を害し、十六日には流産をしたが爲め、一時は命の程も危かつた。病後の衰弱で神經過敏になつてゐた妻は、夫の旅立を引止めようとした。又た三歳になつた男兒（一八一九年十一月生）の健康も、多少心配になつてゐた。彼女は二度も三度も、良人を呼び返した。若し彼が早く歸らなければ、子供を連れて、ピザへ往かうといつた。そして良人の後姿を見送りながら、さめ〴〵と泣き伏した。

その夜の九時に彼はレグホーンへ着いたが、檢疫の都合で翌朝上陸した。處がバイロンは、米國か瑞西へ往かうとして居つた。それは彼の友人Gamba（ガムバ）

伯が、革命の主謀者として、Tuscany（タスカニ）から追放せられたが故であつた。（ガムバ伯は、ギッチオリ伯の父）。然るに若しバイロンが居なくなつたならば、折角ハントを呼びよせながら、雜誌を發刊する計畫は、どうなるものかと、シエリーは胸を痛めずにはゐられなかつた。兎に角彼は宿屋でハントに會つた。ハントの息子 Thornton（ソーントン）は、シエリーが父の兩腕に飛びついた時のさけびを、多年忘れることが出來なかつたといふ事である。二人の親友は四年目に再會した。四年の星霜は、決して短いものではなかつた。ハントの頰はこけた。シエリーの髪は白くなつた。たゞ外面の容貌のみではない、二人は人生の苦い經驗を嘗めた。

シエリーはハント一家を引連れて、ピザへ往つた。其處で用意をして置いた家へ落着かせた。ハントは決してバイロンから暖い歡迎を受けなかつた。シエリーは二人の間に立つて、一方にはハントを勵し、一方にはバイロンに約束を想ひ起さしめて、雜誌「自由」の話もきめた。六日迄にはゞ豫定の仕事も形付いた。七日はハントを案内して、ピザの斜塔を見物した。その日彼はハント夫人に言つた。「若し私があす死んでも、父よりは長生きしたのです。私は九十歳ですから。」彼は三十歳であつたけれども、彼の思索體驗は、凡人の九十歳に勝つたことはいふまでもない。その晩にシエリーはハントに訣れた。ハントはキーツの第三卷の詩集を與へて、航海中の徒然に讀めといつた。そして明日天氣が惡ければ、決して出發するなと戒めた。シエリーは馬車に乘つて、暗を衝いてレグホーンに向つた。

その夏は非常に暑かつた。連日の旱天の爲め、日中の野良仕事は、動もすれば死人を出すので、その筋から禁じられて居た。教會では雨乞ひの祈禱

會が催されたが、一滴の雨も降らなかつた。七月八日(月曜)の朝は、天候に多少の變徴があつて、一旦現れた雷雲も、間もなく消えて、もとの蒼空に還つて終つた。シェリーは午前中、銀行へ往つたり、色々の買物をした。やがてレリチの方へ吹く輕い風が起つて來た。ウイリアムスの友人Captain(キャプテン) Roberts(ロバーツ)は、暴風雨の掛念があるので、明日まで出發を延期するやう勸告した。

シェリーと共に來たウイリアムスは、ピザから一足先きにレグホーンへ歸つた。彼はエーリエル號に乘つて、一刻も早く家へ歸らうとあせつて居た。シェリーも數日家をあけて、病後の妻も氣づかはしく、僅かに七時間の航海を、そのやうな忠告で斷念することは出來なかつた。晝すぎに二人は、Charles(チャールズ) Vivian(ヴァイヴィアン)といふ少年水夫を連れて、エーリエルに乘り込んだ。

テゥレローニは、バイロンのヨット Bolivar(ボリヴァー) に乘つて、沖合まで見送る筈であつたが、出港許可證を得てなかつたが爲め、止むを得ず望遠鏡を持つて、友人の船の進行を眺めて居つた。彼の友人でヂェノア生れの水夫は、水平線上に出て來た雲や、海上にこめた煙を指して、惡魔がいたづらをやつて居ると言つた。海面にはもやが掛つて、シェリーの船もやがて見えなくなつた。太陽は霧に隱れたが、堪へ難い程蒸暑かつた。港には全く風が凪いで、妙に重苦しい氣分になつたテゥレローニは、船室に降りて、晝寢をした。やがて彼はたゞならぬ物音に目覺めて、甲板にかけ昇つた。「港内の船といふ船は大騒ぎをして居つた。位置を移すもの、帆檣を倒すもの、碇綱を操出すもの、大綱をたぐるもの、碇を下ろすもの、船と波止場から呼び交すものもあれば、その間を艀船が縱横に飛んで居た。まだ漸く六時半でありな

がら、殆んど夜のやうに暗かつた。海水は色が變つて、鉛の如く固く滑かに、油のやうな泡が一面に浮いて、風がその上を、波も立てずに吹いてゐた。大きな雨の滴が、海面に落ちてははねかへつた。海の方から、恐ろしい響が襲うて來ると、空は鳴つてどよめいた　漁船や地廻り船は帆を下ろして逃げ込んで、中には碇泊中の船に衝突するのもあつた。さりながらこの騒がしい音は、人間の叫聲であつたが、それは頭の上で鳴り出した雷のために消されて終つた。暫くは雨と風と雷の響のみであつた。二十分とは續かなかつたこの恐ろしい暴風雨が靜づまると、やゝ沖の方が晴れたので、そのあたりに散在した小船の間に、シェリーの船は見えまいかと、氣づかひながら海の方を眺めまはした。私（トゥレローニ）は水平線に現れて來る黒點を見逃さないやうにして、同じ方向に出た外の舟のやうに、多分歸つたこと、思うてゐた。」（七七――七八頁）

テゥレローニは、港に逃げ込んだ船に就いて、調べて見たが、何の手がかりも無かつた。その晩は風が吹いて、折々雨が落ちて、電光さへ閃めいた。翌日彼は、更に詮議を續けたが、水夫どもは知らないのか、それとも言はないのか、一向要領を得なかつたが、ヂェノア生れの友人が、漁船の上にあつた英國製の櫂を指して、シェリーの船で見たものらしいといつた。然しその船に乘つて居たものは、神かけて之を否認した。かくて不安な一日も過ぎた。彼は三日目にピザへ往つた。シェリーの家から、手紙が來て居るのをあてにしてゐたが、その期待は裏切られた。そこでハントとバイロンとに、事の顛末を話して、海岸を捜索した。七八日も過ぎた頃、海岸に二人の屍體が見つかつた。その一つは Via Reggio（ヴィーア レッヂオ）から遠からぬ處に、打ち

揚げられてゐた。顔や手や、その他着物に蔽はれない部分は、肉が失せてゐた。そのすらりと脊の高いからだ、そのジャケツ、一方のポケットには、ソフォクリーズの一巻、他のポケットには、折り返したキーツの詩集などを見て、それがシェリーの屍體であつたことは、少しも疑を容れる餘地が無かつた。又た三哩許り離れた海岸に發見された方は、襤褸になつたシャツ一枚を着たまゝで、それを脱ぐためであつたか、半ば頭部を包んでゐた。黒い絹の手巾を、水夫のやうに頸に巻きつけ、靴下を穿いたまゝで、靴は片方しか無かつた。筋肉はぼろ〳〵にたゞれて、中から骨がのぞいてゐた。テゥレローニは、ウィリアムスの靴を、シェリーの家から持つて來て、その屍體の靴に合せて見ると、寸法は少しも違つて居なかつた。水泳の出來たのは、ウィリアムスだけであつたから、彼が最後まで生き殘つたであらう。

更に三週間を經て、少年水夫の遺骸が見つかつた。

八月十四日テゥレローニは、ハントとバイロンとを招いて、その儘砂に埋めて置いたウィリアムスの屍體を火葬した。その翌日には、シェリーの遺骸を掘り出したが、前には Gorgona（ゴルゴナ）, Capraji（カプラヂ）, Elba（エルバ）の島々が浮び出た海を控え、後ろには大理石を戴いたアペナインの峯が、夏の日を浴びて、繪のやうな姿を見せてゐた。シェリーが生前には、かうした雄大な、又た物淋しい景色が好きであつたことを思ひ浮べて、清らかな砂の中から、爛れたむくろを、白日の下にさらけ出すのは、狼か野良犬の仕業のやうに思はれたと、テゥレローニは書いて居る。バイロンは彼に、シェリーの頭蓋骨を殘して置いて呉れと頼んだが、嘗てバイロンが、頭蓋骨を酒杯に使つたことを思ひ出して、斷じて與へないことにした。彼は薪に火をつけた。酒を屍體

に注ぎ、更に鹽と油とを加へると、盛に燃える火の中に、胴體は崩れて、心臟が見えて來た。やがて五體が灰になつて、大きな骨だけ殘つたが、心臟は元の形を失はなかつた。彼はすばやくそれを握み出して、手にはひどい火傷をした。その心臟は、テゥレローニがもらつたけれども、後になつて之を未亡人に贈つた。彼女は之を絹の布に包み、更にビザ出版のアドネースの間に挾んでゐたことが、彼女の死後に發見された。そして遺子フローレンスが一八八九年に死んだ時、その心臟と一緒に葬られた。

シエリーがスペチアの海岸に居を移してから、不吉な出來事が度々あつた。アレグラの姿が海上に現れて、シエリーを招いたのは、五月六日のことであつた。六月廿二日には、恐ろしい叫聲と共に、彼は自分の部屋から飛び出して、家中の者を驚かした。外套に體を包んだ者が、彼に手招をしたのだが、それは自分の姿であつたことが分つた。又たシエリーやその友人どもが集つて、死の問題について、樣々の話が出たことがあつたし、ヂューンは彼に、「あなたはお友達のプラトーと、御一緒になるお積りですか」といつたこともある。更に不思議なのは、彼が詩の中で、海上に非業の最後を遂げる豫覺を書いたことである。

前々章にも述べた通り、アドネースの最後の章は、シエリーが若死する豫言と見られる。又たアラスターには次のやうな句がある。

A restless impulse urged him to embark
And meet lone Death on the drear ocean's waste. ll. 306—7.

不安な念ひにせき立てられ、
舟に乘つて海の上に獨りで淋しう死なうとした。

其の他これに似た句を拾うて見ると、

Till death like sleep might steal on me,
And I might feel in the warm air
My cheek grow cold, and hear the sea
Breath o'er my dying brain its last monotony.
Stanzas Written in Dejection near Naples.

遂に死が眠の如く襲ひきて、
熱き風に我が頬の冷うなるを覺え、
死んで行く頭の上に、
ものうい海の響が聞えよう。

又た「自由に與ふる歌」(Ode to Liberty)には、波が「狂ひ戯れながら、溺れた人の耳元に哮つて居る」とある。

Hiss round a drowner's head in their tempestuous play.

シェリーは死を以つて人生の終りと考へず、實は人生の始めと信じてゐた者である。從つて彼は、心靜かに避くべからざる運命に、一身を委ねたものと考へられる。シェリーの屍體は、上衣を着たまゝであつたが、ウィリアムスは、シャツ迄も脱がうとした形跡が、見えてゐたのでも分る。ヂェネヴァの湖を、バイロンと航行中、舟が覆らうとした時に、彼は從容として、そのまゝ水に沈まうとした。彼は自殺を考へたことさへあつた。レリチヘ來てからのことであつた。ウィリアムス夫人とその子供等を誘うて、防水布張りの脆い船に乘せ、深みの方へ漕ぎ出して、彼は暫く考へ込んでゐたが、ふと顔をあげて、嬉しさうに、「さア皆さん一緒に、神秘の謎を解きませう」

と言つた。ヂューンは言葉巧みに欺いて、岸の方へ漕ぎもどらせ、底が見えて來た時に、子供をかゝへて飛び出した。

新たなる未亡人は、亡き夫がキーツの死を悲んで、その骨を埋めた羅馬の英人の墓地が、かのアドネースの中に、美しう描き出してある一節を、思ひ出さずには居られなかつた。

Go thou to Rome,—at once the Paradise,
The grave, the city, and the wilderness;
And where its wrecks like shattered mountains rise,
And flowering weeds, and fragrant copses dress
The bones of Desolation's nakedness
Pass, till the spirit of the spot shall lead
Thy footsteps to a slope of green access
Where, like an infant's smile, over the dead
A light of laughing flowers along the grass is spread.

汝羅馬へ往け。
それはやがて樂園と奥津城と都と荒野！
廢れた跡が崩づれた山のやうにうづ高く、
花の咲いた草や香の高い下生えが、
「荒廢」の露はなる骨を包む所を過ぎよ。
其處なる靈は汝の歩みを導いて、
綠の道の坂を行けば、
幼な兒のゑめるがやうに、死者の上には、
笑ふ花の光が草叢のあたりに廣がる。

シェリーが此の英人の新教徒の墓地を訪づれたのは、彼が伊太利へ來た年(一八一八年)の秋で、彼は再び玆にその記憶を喚び起したのであつた。そのあたりの景色が、彼にはよく〳〵氣に入つたものと見えて、その年の十二月二十二日、ピーコックへ送つた手紙にもかうある。

「英人の墓地は、石垣に近い綠の坂で、ピラミッドの形をした Cestius(セスティウス) の墓碑の下にあります。そしてこれまで私が見た中では、一番美しい又た神々しい墓地でせう。私が初めて其處へ往つて、秋の露にぬれたあざやかな草の上に、日の光が耀くのを見、セスティウスの墓の上や、暖かな日を受けて力づいた土の上に、生ひ茂つた木の葉の間を吹く風のさゝやきを聞き、又た多くは婦人や若い人達が、其處に葬られたしるしを眺めると、若し死んだその時には、そのやうに眠つて見たいと思ふでせう。人情はかうしたもので、その樣々の願を以つて、空疎と忘却とを充たすのです。」

それのみか此の墓地には、その翌年(一八一九年)の六月七日に死んだ彼の愛兒ウィリアムが葬つてあつた。彼はとりわけ此の子を可愛がり、その病氣の時も、六十時間の長きに亘つて、一睡も攝らずに看護した。そこで未亡人は、良人の遺骨をこの墓地に葬ることに決めて、その年の十二月、テゥレローニの世話で、ウィリアムの墓の隣に、彼の柩は納められた。その墓證は拉丁語でハントが書いた。

Percy Bysshe Shelley, Cor Cordolium, Natus IV. Aug. MDCCXCII.
Obiit VIII Jul. MDCCCXXII.

パーシ●ビッシュ●シェリー心の心、一七九二年八月四日生。一八二二年七月八日歿。

この下にテンペストは、沙翁の「あらし」にあるエリーエルの歌を三行附け加へた。

Nothing of him that doth fade,
But doth suffer a sea-change
Into something rich and strange.

彼には褪せるものがないが、
海の爲めには變へられて、
貴い不思議なものとなる。

かくて彼は、キーツと共に、安らかに此の墓地に眠つて居る。彼は抒情詩人として、其の一生は、理想の憧憬に終つたものであつた。

To thirst and find no fill—to wail and wander
With short unsteady steps—to pause and ponder—
To feel the blood rush through the veins and tingle
Where busy thought and blind sensation mingle;
To nurse the image of unfelt caresses
Till dim imagination just possesses
The half-created shadow, then all the night
Sick.....

渇きて水を得ず泣いてさまよふ。
覺束なく小刻みに歩みて止りては考ふ。
脈絡を走る血がうづけば、
千々の思が盲目な感じと亂る。
觸れざる抱擁の面影をはぐくめば、

ほのぐらき想像はかすかなる影を捉ふ。
かくてよもすがら……
これは僅々七行の斷片に過ぎないけれども、彼の内部生活の歴史を、つづめたものと考へられる。彼は人生の寂しい野をさまようて、苦しい胸の悶えを吐いた。それが金玉の文字を連ねた抒情詩となつて、讀む人の心に、共鳴を起させないでは措かぬ。彼は世界最大の抒情詩人として、又た最も純眞な人格者として、永劫に慕はれることであらう。

第六章　キーツとシエリー

バイロン、シエリー、キーツの三人は、ローマンティシズムの運動が、その絶頂に達した當時の英國の詩壇を代表するものである。前章に於いては、バイロンとシエリーとの關係を、簡單ながら述べて置いたから、茲にはキーツとの交渉を、多少詳しく説明しよう。それには先づ背景となるべき時代を明かにする必要があると思ふ。

佛國革命後の英國に於いて、ローマンティシズムの文學が、十八世紀のクラシ、ズムを破壞し、權威と因襲とを破つて、個性と感情とを解放し、理性をその玉座から一蹴し去つた。その當時に於けるバイロンの懷疑思想、シエリーの抒情詩魂(リ、シ、ヅ、ム)、キーツの耽美主義(エスセシズム)が、その後の文學に非常なる影響

を及ぼし、近代思想の源泉を爲して居る。」

十八世紀の中葉から、約百年の間、歐洲の天地に磅礴した革命思想は、感情に激し易く、空想に走せ易い佛國民を驅つて、劍を提げて大革命を斷行し、血潮を以つて染めた、自由の大旆を飜すに至らしめた。然るに由來理性的な、又た實際的な英國民は、筆を以つて文學的の革命を遂行した。十八世紀の擬古典主義(シュードクラシ・ズム)を打破し、エリザベス時代を復興し、內容形式共に自由な、熱情を盛つた、一皮むけば血の迸るやうな文學が生れて來た。

十八世紀の Anne(アン) 女王の時代は、即ち Pope.(ポープ) Dryden(ドライデン) の時代である。Arnold(アーノルド) はいふ、「眞の詩歌と、ドライデン、ポープ及び其の一派の詩歌との差異は、たゞこれだけのことである。彼等の詩は機智(ウイット)によつて作り、眞の詩は靈によつて作つたものである。」彼等の詩は、氣の利いた通人が、垢拔けのした

皮肉をならべたもので、Addison.(アディソン) Pope.(ポープ) Congreve(コングリーヴ) 皆それであつた。Swift(スウィフト) に至つては、全く露骨を極めて居る。彼等の散文は皆洗練せられて居る。その散文に押韻したものが、即ち十八世紀の詩歌であつた。

十八世紀の詩歌は、一種のマナリズムに墮したものであつた。これは彼等が範を古典の權威に求めて、個性の自由を拘束したことに始まる。Virgil(ヴァージル) の詩論(Ars Poetica)や、之を祖述した佛國の Boileau(ボアロー) の詩論(L'Art Poétique)や、ポープの批評論(Essay on Criticism)が、當時に於ける創作●批評の標準となつた。「正確(コレクトネス)」は作家の適從すべき標語であつたから、ドライデンの如きは、沙翁を以つて、Johnson(ジョンソン) より偉大な詩人であるけれども、藝術家としては、之に劣るものと考へた。又た一般にヴァージルは、正確の點に於いて、Homer(ホーマー) に勝るものと信じられた。神秘思想や熱烈な情緒は、決し

て之を表現しようとせられなかつた。平明な常識を、雅言を以つて發表した。その用語には、多大の注意が拂はれたが、それは古典の用例に重きを置いて、俗語の如きは、決して使はれなかつた。彼等は fish（魚）といふよりも、好んで scaly tribe（うろくづ）といつた。今日舊派の歌人が、萬葉を典據として、「眞白に」といふ例はあるも、「眞白き」と形容詞に用ひた場合がないから、かうした使用法を絶對に排斥するやうなものである。

十八世紀の文學は、都會の文學であつた。田園の趣味は全く理解せられなかつた。當時流行の倶樂部に、鬘を被つた通人が、垢拔けのした筆で、氣の利いた機智を書き連ねたものであつた。勿論これには一種の趣味もあるが、彼等が人工的の鬘をつけたやうに、自然な感情の流露を見ることは出來なかつた。純眞な情緒の豐かなる抒情詩は、全くその影をひそめて終つた。抒情詩の寶玉ともいふべき小曲（ソネット）は、Wordsworth（ワーズヴァース）の出るまで見ることが出來なかつた。自然を觀察して、山水の美を歌ひ、更に之に融合して、その精神を體得するが如きは、到底之をその當時の詩人に求めることを得なかつたのである。

この時代の詩壇に覇を稱へたポープの生存中、その詩風に對する反抗起り、自然の中に生存する人間を取扱はうとする傾向があつたけれども、十分に發達することが出來なかつた。十八世紀の中葉に於いては、批評界に於けるヂョンソンの勢力が、再びポープの詩風を勃興せしめ、漸く十九世紀に近づきて、ローマンティシズムの擡頭を見るに至つた。然しながら Goldsmith（ゴールドスミス）の「旅人」（The Traveller）の如き、その他 Darwin（ダーウヰン）, Rogers（ロージャース）, Crabbe（クラブ）の作品は、何れも教訓的（ダイヴクティク）で、矢張りポープ一派の流を汲んで居る。このやうな詩

は、自然がそのまゝに現れず、たゞ人間に關係ある方面を取扱ひ、常識や理性に重きを置きて、感情を疎外して居る。十九世紀になつても、バイロンはポープを尊重し、その「英國詩人と蘇國批評家」(English Bards and Scotch Reviewers) の如きは、ポープ、ドライデンの諷刺を傳へたもので、キーツが「眠と詩」(Sleep and Poetry)に於いて、ポープやポアローに慊焉たる態度を示したのを見て、憤つたこともあつた。

然しながら先づ、自然のために自然を歌ひ、ローマンティシズムの先驅をなしたものに、Thomson の「四季」(The Seasons—1726—30)や、Gray の「墓畔の哀歌」(Elegy in a Country Churchyard—1751)や、Goldsmithの「寂しい村」(The Deserted Village—1770)や、Cowper の「仕事」(The Task—1785)の如きものがある。又た古詩の研究起り、Chaucer, Spenser の飜刻となり、沙翁はポープ（一七二五年）、Theobald（一七三四年）、チョンソン（一七六五年）等によりて出版せられ、有名なシッドンス夫人(Mrs. Siddons)は、沙翁劇を復活した。Thomas Percy の「古詩拾遺集」(Reliquiae of Ancient English Poetry—1765)や、Macpherson の Ossian (1760—63) の如き、技巧に囚はれず、眞情の流露した古詩が出て、一般讀書界の注意を惹いた。オシアンはマクファーソンの僞作と思はれるけれども、Sturm und Drang Periode（傳統破壞時代）の獨逸文學にまで影響し、ゲーテは Werther の中に、その一部を飜譯した。當時オシアン黨は、ホーマー以上に評價し、非オシアン黨は、その價値を認めて、その存在を疑ふものと、その價値も存在も認めぬものとあつた。Chattertonが十五世紀の詩と稱して、「ローリー詩集」(Rawley Poems) を出したのも、恰度この當時のことであつた（一七六八年）。

恁うしてクラシ、ズム破壞の機運は漸く熟し、ローマンティシズムの詩人が追々現れて來た。その主なるものを擧げて見る。

George Crabbe (1754—1827) はポープの詩形を以つて、地方の生活を寫實的に描いた詩人で、その代表作は「村」(The Village—1783) である。十九世紀になつてから、數冊の詩集を出したが、その詩形は近代的となつた。

William Cowper (1731—1800) は、Coleridge の先驅者と見るべき詩人である。

Robert Burns (1759—96) は蘇國の貧しき農家に生れ、教育を受けず、たゞ好んで詩を讀み、エディンボローに出で、世に知られた詩人となつた。殊に抒情詩に立派なものが多い。田舍少女の戀を歌ひ、貴族文學を平民化し、百姓の爲めに氣を吐いた。

William Blake (1757—1827)は、十九世紀の後半になつて、Swinburne の評傳で知られて來た。Ellis と Yeats の二人、その全集を出版し、Symons その傳を書いて、愈世に認められるやうになり、版畫家として、又た神秘思想の詩人として、特殊の位置を占めて居る。

十八世紀の終りになつて、佛國大革命の進行中、ローマンティシズムの運動は益々盛となり、ワーヅワースはコールリッヂと、「抒情詩集」(Lyrical Ballads) を出版した(一七八九年)。後者の「老水夫」(Ancient Mariner) は、この集に寄せられたのであつた。この二人に Southey を加へて、湖畔詩人と稱せられて居る。次いで Scott が出た。中世紀の傳說を復活して、「湖上の美人」(The Lady of the Lake) などを出したが、まだ政治●宗教●道德●社會組織に向つて、革新の聲を揚げた者はなかつたのである。この革命思想

は、バイロン、シェリーに至つて、はじめて現れて來た。キーツは耽美派の祖として、又た希臘思潮を復活したものとして知られて居るが、政治問題や社會問題には、全く興味を持たなかつたのである。

然らばクラシ、ズムを打破したローマンティシズムとは如何なるものか。これには樣々の說があつて、殆んど之をまとめることが出來ない。Heineは中世の詩歌の復活 (die Wiederweckung der Poesie des Mittelalters) といひ、Pater は好奇心と美の愛(Curiosity and the love of beauty)といひ、Dr. Hedge は神秘と憧憬(mystery and aspiration)にありといひ、Colvin は昂奮の氣分から生れたものと解して居る。又た獨逸にては、中世への復歸、佛國にては、靈の再發見、英國にては、自然への復歸と考へられる場合もある。されば Neilson はその著「詩歌の眞髓」に於いて、次のやうなことを書いたのは、尤もな次第である。

「藝術的批評の術語の中で、ローマンティシズムほど、よい加減に用ひられ、又たこれほど色々に定義せられるものはない。さればブレークの超越的、クラブの現世的、バーンズのデモクラシー、スコットの封建的、ワーヅワースの信仰、バイロンの懷疑、トムソンの寫實、或はシェリーの空想の背景に漂うて、現實の山水を照らしたことのない光が、漲つて居る風景を說明するに用ゐられて居る。さればこの渾沌を脫して、一定の秩序ある概念を形づくることは、少からぬ勇氣を要する」(Essentials of Poetry.P. 49)

ローマンティシズムの文學は、貴族より平民へ、都會より田園へ、理性より感情へ移つたものである。

Rousseau の自然復歸主義は、佛國に於いて政治的革命となり、英國に於

いて文學的革命となつた。都會の文學、貴族の文學、サロンの文學を破壞し、平民の爲めに氣を吐いた文學が起つて來た。バーンズが、「公侯は王者の一呼吸に過ぎず」(Princes and lords are but the breath of kings.—the Cotter's Saturday Night)と喝破したのが即ちそれである。ワーヅワースは「抒情詩集(リ・カル・イラーブ)」の序に於いて、これ等の詩は、主として題を平凡なる生活の出來事より取り、成るべく實際に使用せられる言語を選擇し、之に想像の着色を加へた。且つ主として田園生活を選んだのは、人間の感情が、都會に於けるよりも、拘束なしに培はれ、思ふがまゝに發育する。又た人は明瞭に力强い言語を話し、うぶな感情は永久に、美しい自然の姿に結び付いて居るからだと述べてゐる。

都會より田園に移つた文學は、「自然」に目覺めざるを得ない。從前の文學は、自然を人事の背景としたが、玆に至つて自然そのものを歌つた詩歌が生れた。それのみならず、從來よりは全く自然觀を異にし、山川草木は、宇宙の本體或は精神の顯現と考へ、唯心論の立場から、吾人と同じ情緒を持つものと見做すのである。これは自然詩人としてのシェリーを論じた章に述べた通りである。

理性から感情へ移つた文學は、勿論抒情詩に重きを置かねばならなかつた。抒情詩は斷腸の思を叙べたものである。刺された胸(Cor laceratum)の苦しみを吐いたものである。佛國革命は歐洲の大動亂となり、一般の精神界に不安・動搖を來たし、外に向つた心が內に向ひ、自己の苦悶を直接に表現して、こゝに抒情詩が現れた。シェリーは人類の解放の爲めに努力したが、自分の理想が實現しないのを見て、悲觀厭世の詩を作つた。

ポープは、「生學問は危ないものだ。深く飲め。然らずむばピエリアの泉を味ふな。」

A little learning is a dangerous thing:
Drink deep, or taste not the Pierian spring.
Essay on Criticism.

といふやうな平凡な常識を、押韻した散文で書いて居るが、やがてはバーンスが、熱烈な田舍少女の戀を歌うて、「たとへちゝはゝの氣が狂ふとも、わしは往きますお前の許へ。」

Tho' father and mither and a'should gae mad,
O whistle, and I'll come to you, my lad.

と極めて大膽に、因襲を離れて、自我を肯定しようとする叫びを揚げた。

かくて啓蒙時代(アウフクレールングスベリオーデ)の理性萬能は破れて、感情は解放せられ、又た同時にその價値を認められたのである。

平民文學は田園の生活を喜び、感情を尊重したが爲めに、極めて自然に人間の眞情を吐いた民謠(フォルクスリード)が研究せられるやうになり、バーシーの「拾遺集(リツクス)」のやうなものが、各國に出版せられたが、英國に於いても、古謠體(バラード)の詩形を模した詩人が現れた。キーツの「セント・マークの宵宮」(The Eve of St. Mark)の如きが即ちそれで、ついで Tennyson(テニソン), Rossetti(ロゼツテイ) に至つて、立派なものが多く出來たのである。

民謠の研究は、傳說・神話の復活となり、更に希臘思潮や、中世精神の復興となつた。我等の美的情操に、多大の滿足を與へる希臘神話が、ローマンティシズムの詩人に歡迎せられたのは尤もな次第で、キーツが優婉・華麗な

筆致を以つて、この精神を表現した立派な詩歌を遺し、後のテニソンやスキンバーンに大なる影響があつた。Landor も亦た希臘詩人であつた。キーツの耽美主義は、矢張ローマンティシズムの文學の一面を代表し、特に彼は官能が鋭かつた。この官能の發達は、自然觀の變化より來たものである。

中世精神の復興に與つて力あつたのはスコットである。從來 Gothic は野蠻の同意語であつたのが、Romantic の意義に解せられるやうになつた。中世を暗黑時代と考へるのは、理性萬能時代の見方であつて、奇を好んだ浪漫派の精神は、Arthur 傳說に見るやうな、敬虔な信仰や、狹任の武士的精神や、女人崇拜の盛んであつた中世にあこがれた。キーツの「セント・アグネスの宵宮」(The Eve of St. Agnes)や、テニソンの「帝王牧歌」(The Idylls of the King) や、ロゼッティの Sister Helen や「祝福された少女」(The Blessed Damozel)の如きが、この精神を歌つたものである。

かうして時間的に過去に溯つたローマンティシズムは、更に空間的に材を國外に求め、所謂異國情調 (Exoticism) を喜び、シェリーの愛誦したサウジーの Thalaba の如きは、舞臺をアラビヤに取つた。或は又た奇怪なるものを求め、文學の內容が多方面となるにつれて、是れを表現すべき語彙も、その選擇が自由となり、古語を復活して、古代の空氣を取入れると共に、新語を使用して、新思想を盛らうとした。從つて詩形もその種類が多くなり、佛伊の形を模したのもあれば、小曲も復活されたのであつた。

クラシ・ズムの衰頽につれて南歐の文星ダンテは、再び英國の文壇に光を放つた。元來ダンテはチョーサーもスペンサーも愛讀したものであつたが、ミルトン以來廢れて終つた。グレーは神曲の一部を譯し、コールリッヂ

はダンテの講演を試み、バイロンは「ダンテの豫言」(Prophecy of Dante)を ものし、ハントは「リミニの話」(Story of Rimini)を書いた。又たCaryは神曲を譯し、キーツも之を讀んだし、今日も尙行はれて居る。

ローマンティシズムの文學は、キーツに至つてその最盛期に達し、その傳說は正統派(オーソドックス)の詩人テニソン、及び現代の挂冠詩宗Robert Bridges(ロバート ブリッヂス)に見られる。Bagehot(バヂエット)が所謂テニソンの文飾藝術(ornate art)なるものは、キーツの流れを汲んだもので、ブリッヂスの長篇の如きも、その手法は全くキーツを聯想せしめる。キーツが「つれなき美人」(La Belle Dame sans Merci)に描いた中世の人の夢は、ロゼッティの中世精神(メディエーヴァリズム)となつて現れた。前者の耽美主義は、後者之を繼承し、而かも二人とも官能的であつた。又たスキンバーンやペーターのペーガニズム讃美は、キーツの希臘精神(ヘレニズム)を傳へて居る。

ヂョン・キーツは一七九五年生れのロンドン兒で、シェリーよりは、三歲の弟であつた。バイロンやシェリーのやうな名門の出ではなかつたので、餘程彼は之を氣にしたものと見える。彼が九歲の時、父は馬から落ちて、非業の死を遂げ、十五歲の時、母は肺病で亡くなつた。この年彼は學校を退學して、外科醫の書生となつたけれども、多感な彼の性格は、メスを執つて、人の肉體を扶るやうな職業を嫌つて、遂に文學を以つて世に立つやうになつた。一八一七年(二十二歲)初めて處女作「詩集」(Poems)を世に出し、翌年には長篇Endymion(エンディミオン)を發表して、當時の批評家から、いはれもない人身攻擊に亘るやうな嘲罵を蒙つた。一八二〇年(廿四歲)の二月、初めて喀血し、同年七月第三の詩集を公にした。これこそ彼の名を不朽ならしめた名篇傑作を集めたものであつた。然るに彼は當時の文壇に容れられ

ず、世の憂きに煩ひ、母譲りの肺に惱み、身を切るやうな戀に悶え、貧しい境遇に苦んで、その命數は兩端から燃やした蠟燭のやうに、見る〳〵盡きて行かうとした。彼はその秋伊太利に轉地し、ローマに病を養うたけれども、翌年の二月廿三日、友人の畫家 Severn（セヴァン）に抱かれながら、廿五歳を一期として、異鄕の空に淋しう死んだ。戀人に訣れ、弟妹親友に離れて、時にはパンさへも滿足に得られず、のたれ死（じに）同樣の死態をしたことは、古の文豪スペンサーの末路も思ひやられて、哀れな次第であつた。彼は死期の迫つたのを識つて、セヴァンに遺言し、自分の墓碑には、

Here lies one whose name was writ in water.

名を水に書きし人の墓

と刻むやうに賴んで置いたが、「風が吹いてその名が消えぬ間に、死もむざ〳〵と彼を殺したのを悔んでか、不朽を與へる力を持つた冬のやうな死は、その水の流れを吹き渡り、跡をも止めぬ時の早瀨は、水晶のやうな卷物となつて、アドネースの名を光ちして居る。」

Fragment on Keats,

Who Desired That On His Tomb Should Be Inscribed—

"Here lieth One whose name was writ on water"

But, ere the breath that could erase it sllew,

Death, in remorse for that fell slaughter,

Death, the immortalising winter, flew

Athwart the stream,—and time's printless torrent grew

A scroll of crystal, blazoning the name

Of Adonais,—

Shelley.

キーツが一八一七年五月十日、ハントに送つた手紙の一節に、「シェリーは相變らず王者の最後の珍しい話をしてゐますか。詩人の最後にも珍しい話のあることを知らしてやつて下さい。世に知られないで死んだ詩人もあるのです」とある。これには面白い逸話がある。嘗てハントとシェリーとの二人が、乘合馬車に乘つてロンドンへ出掛けたとき、たゞ一人の老婦人が乘り合せて、靜かにつゝましげに坐つて居たが、シェリーは突然ハントを呼んで

For God's sake! let us sit upon the ground,
And tell sad stories of the death of kings.

後生だから、地上に坐つて、天子の最後の悲しい話をしよう。

とリチャード二世の臺詞を、眞面目に述べ立てたので、その婦人は、今にも二人が坐るものと考へて、馬車の床を詰めてゐたさうだ。この頃シェリーは口癖のやうにこの句を引き合ひに出したものと見える。

キーツが此手紙を書いた當時は、恰も彼が處女作を出版して、愈その生涯をミューズの神に捧げる決心の臍を固め、前途に洋々たる春の海を望みながら、多大の抱負を持つて居つた。それが僅々四年の後、不治の病に取りつかれて、遙々敗軀をローマに運び、戀人に訣れた無限の恨を懷きながら、淋しい下宿に血を吐いて、儚ない最後を遂げようとは、夢にも思はぬことであつただらう。彼の最後は、彼自らの所謂、「詩人の最後の珍しい話」(strange stories of the deaths of poets) の一例でなくて何であらう。シェリーの死も亦たさうであつた。彼は死を豫定し、僅々廿分の暴風雨の爲めに溺死した。その翌月エーリエル號を、Via Reggio (ヴィア レッヂオ) の海岸二浬許りの沖合

から、引揚げた時に、右舷の甚しく損傷したことから、衝突の爲めに沈んだといふ意見もあつて、ハントも之を否定しなかつた。その後一八七五年、Sir Vincent Eyre（サー・ヴィンセント・エーア）がタイムスに寄書して、二十年前に死んだ水夫の罪惡を公にした。それは五人の水夫が共謀して、難破しかけた英船に、バイロンが乘つて、それには澤山の金銀があるものと考へ、之に衝突沈沒せしめたのを、後になつてその一人の水夫が、牧師に懺悔したといふのである。その牧師は之を伊太利の貴族に傳へ、その貴族は之を、スペチア灣に臨んだ別莊の女主人に物語り、更にそれをサー・ヴィンセント・エーアが聞いたのであつた。又たテゥレローニも之を聞いて、五十年の謎が解けたといつたさうである。是に於いてシエリーの死は、益々不思議な物語たらざるを得ないのである。

キーツは非常に死を恐れた。伊太利へ轉地の途中、親友 Brown（ブラウン）へ船中から送つた書狀に、「私は死の來ないことを祈ります。何となればそれは、無よりはましなこの苦痛を破壞するからです。」と書いて居る。嘗ては靈魂の不滅を信じたことのある彼も、愈死の手が彼に加へられようとした時に、「私は靈魂の不滅を信じ度い」と叫んで居る。彼は敬虔なる信者ではなかつた。一八一八年の夏、彼はブラウンとスコットランドを旅行して、Ben Nevis（ベン・ネヴィス）の頂上に登つた時、一朶の暗雲が二人を襲うたので、靜かに石の上に坐つて居ると、やがて雲が晴れて、足許には恐ろしい斷崖が現れた。その時作つた小曲（ソネット）に、「崖をのぞけば、雲の幕に掩はれて居る。人類が地獄に就いて知る所も亦たこの通りだ。仰げば暗い霧がある。人類が天堂に就いて語る所も亦た斯くの如きものだ。狹霧は我が前にも下にも廣がつて居る。人が

銘々の己れを知ることも亦たこの通り定かならぬ。」とある。

I look into the chasms, and a shroud
Vaporous doth hide them,—just so much I wist
Mankind do know of hell; I look o'erhead,
And there is sullen mist,—even so much
Mankind can tell of hean; mist is spread
Before the earth, beneath me,—even such,
Even so vague is man's sight of himself!

同じくクリスチャンでなかつたロゼッティも、この詩が、キーツの作品中で、最も考へ(ソートフル)への深いものだと評して居る。キーツは宗教に冷淡で、死後の天堂よりも、現在の快樂に執着した。

無神論を唱へてオックスフォードを退學になつたシェリーも、勿論クリスチャンではない。然るに彼は一種の信仰を持つて居た。彼は死を以て生の終りとは考へず、寧ろその始めと信じてゐた。死は肉體に囚はれた靈魂を解放し、肉眼を掩うた幕を破つて、現象の本體を認識せしめるものである。死者は吾人の經驗の範圍外にあれども、決して消滅したものではなく、久遠の一部となるものである。これが彼のアドネースや、「ねむり草」に現れた死の觀念で、キーツのやうな悲觀的思想を懷いた者ではない。尤もThompson(トムソン)——加特力信者であつた彼は、シェリーに基督教の信仰がないと批評するこれはシェリーの立場から已むを得ぬことである。又た彼が從容として死が、に就いたに相違ないことは、前章に述べて置いた通りである。

キーツとシェリーとが、初めて相識の間柄となつたのは、ハントの家で紹介せられたのが、抑々の始りであつた。ハントが時の攝政、後のヂョーヂ四

世を、自分の主裁する Examiner（エキザミナー） 紙上に攻撃したことがあつた。王が王妃 Caroline（カロライン） と結婚の當夜、酒に酔うて狂態を演じ、其の後兎角琴瑟相和せざるが爲め、妃は愛人を伴うて大陸を漫遊し、歸國後離婚問題の起つた時、各地のホテルの給仕などが、多數證人として召喚せられた。(キーツの The Cap and Bells と、Shelley の CEdipus Tyrannus とは、この事件に對する諷刺（サタイア）であるが、何れも不成功に終つてゐる。)然るにハントは誹謗罪に問はれ、Surrey（サーリー） の獄を出たのが、一八一五年の二月であつた。その時キーツは、「ハント氏出獄の日に書ける」(Written on the Day that Mr. Leigh Hunt Left Prison)と題した小曲（ソネット）を作つて居る。この詩に現れたハントは、詩人としてのハントであつて、彼が自由思想を抱いた政論家として、又た時のカッスルリー卿の內閣に反對した進歩黨の論客として現れてゐない。彼は徒らに囚屋の壁に面して居たわけではない。「時にはゆくりなくスペンサーの館に遊び、或は美しい四阿屋に、妖艶な花を集め、或はミルトンと共に、天上を飛翔した。」

In Spenser's halls he strayed, and bowers fair,
Culling enchanted flowers; and he flew
With daring Milton through the fields of air.

この一節は、詩人としてスペンサーに私淑したキーツ、又た政治問題に趣味なく、佛國革命に超然たる態度を持したキーツを表現するものである。一八一六年の春まだ淺きころ、キーツは友人 Cowden（カウデン） Clerke（クラーク） によつて、ハントに紹介してもらつた。クラークは彼の文學趣味を啓發した友人で、スペンサーの「仙女王」（フェアリー・クヰーン）を貸したこともあるし、音樂の趣味さへ鼓吹した。

ハントはキーツの天才に感心したが、未だその作品を賞讃しなかつた。二人はこゝに親しい間柄となつて、ハントはその若い友人の溫い感情、豐かな想像をうれしく思つた。されば作詩に讀書に散策に、二人が離れぬことが多かつた。又たスペンサーのキーツに及ぼした影響は、初期の作品や、エンディミオンに現れて居る。キーツはその當時スペンサーの衣鉢を傳へた大詩人こそは、ハントその人であると信じ、爲めにハントの影響を受けることが多かつた。この點はキーツの不幸であつたが、しかし最も早くキーツの天才を認め、之を保護奬勵したハントの功も多とせねばならぬ。キーツがハントに紹介せられた晩に、ミルトンやペトラルカを憶ひながら、悅び勇んで歸るそのさまが、次の小曲(ソネット)に窺はれる。

Keen, fitful justs are whisp'ring here and there
Among the bushes half leafless and dry;
The stars look very cold about the sky,
And I have many miles on foot to fare.
Yet feel I little of the cool bleak air,
Or of the dead leaves rustling drearily,
Or of those silver lamps that burn on high,
Or of the distance from home's pleasant lair.

嚴しい木枯が葉の落ちた乾びた籔を吹いて居る。
星は空につめたう見え、
私の行手は遠い。
されど風の寒さも、
枯れ葉のもの凄いそよぎも、

御空に燃ゆる銀燭も、
我が家の溫かい床に遠いことも、
私はさばかり苦にならぬ。

之に反してシェリーは、自由思想家として、ハントに交際を求めたのであつた。一八一三年二月、ハントが二ヶ年の禁錮と五百磅の罰金を科せられた時、シェリーは憤懣禁ずべからず、「恐るべき不當●暴戾の判決を見て、私は憤りに沸えくりかへつて居る。」といふ書出しの手紙を、ロンドンの出版業者 Hookham（フッカム） に送つていふには、ハントは勇敢で善良で教養のある人だ。社會公衆は、彼等に代つて自由の闘士となつたハントの爲めに、多額の罰金を負擔することを辭するものでなからう。私は今金の都合が惡いが、茲に持合せが二十磅ある。どうか之を寄附金の一部に加へてもらひ度いと。

尤もハントはこの罰金を自ら支拂うて、他人の補助を受けるのを屑しとしなかつた。

シェリーがオックスフォード大學に居た頃、即ち一八一一年三月二日、ハントに一書を送り、ハントを當時の最も大膽なる自由思想家の代表者として、敬意を表したことがあるが、その後自らハントを訪問して、詩の出版に關する助言を乞うた。然しながらまだ親密なる交誼が成立したのではなかつた。一八一六年十二月一日、シェリーはハントから手紙を受つた。それはハントが、その日のエキザミナー紙上に、「若き詩人」(Young Poets) と題する評論を發表した消息であつた。若き詩人とは、キーツ、シェリー、及び John（ヂョン）, Hamilton（ハミルトン）, Reynolds（レイノルヅ） の三人で、他日新詩壇に貢献すべき、前途有望の青年詩人として、之を社會に紹介した。シェリーはアラスターの著者とし

てあつた。こゝでシェリーは、直ちにハントを Hampstead（ハムステッド）に訪問して、暫く滯在したが、非常に滿足したやうであつた。

シェリーが第二回の瑞西旅行から歸つた一八一六年の秋は、精神上に色々の打擊を受けて、驚愕●悲哀●懊惱一時に來り、苦悶の月日を送つたのである。Fanny Imlay（ファニー・イムレー）即ちメーリの實母の先夫の娘が、シェリーに戀して悶々の情に堪へず、メーリや義妹クラ丶との交情は日に疎くなり、家庭には繼母即ちゴッドウィンの後妻あり、只一人の賴みとする伯母よりは冷酷な仕打ちを受けた　我はこの世に生き甲斐なき者と思ひ、又た生きて他人に迷惑を及ぼすを恐れ、かねて養父の自殺論に共鳴した彼女は、家出をして宿屋の一室に、毒藥を仰いで死んだ。この時シェリーは一方ならず胸を痛め、ために健康を害して、神經衰弱に惱まされた。續いて先妻のハリエットが失踪し、サーペンタインに屍體が浮んだ。ハリエットの父が親權喪失を告訴した。クラ丶はバイロンの胤を宿して、少からずその心を惱まし、動もすれば自殺の恐れがあつた。この傷心の秋冬の日に、シェリーはハントの交友によつて、多大の慰藉を受けたのであつた。

一八一七年二月五日の晩、初めて三人の若い詩人が、ハントの家に相會して、晩餐の卓を圍んだのであつた。これが抑々キーツとシェリーとが、相識るに至つた最初の幕である。シェリーは始めからキーツを愛したが、キーツはシェリーに隔意を持つて居つた。シェリーは名門の出であつたが、キーツは馬車屋の倅に生れ、父は元來その家の奉公人が、主人の娘と結婚したものであつた　そしてその素性は全く分らない。キーツは之を氣にして、ハントの言葉を假れば、名門の人に對しては、「生來の仇敵（ナチラデル・エニー）」として之

を見る傾きがあつた。シエリーはキーツを保護（パトロナイズ）するやうな態度で、上手（うはて）に出たやうである。社會の風俗・習慣、その他有ゆる歴史的制度・因襲に對する偶像破壞者たるシエリーの主義主張と、彼の實際的行爲との間には、多少相容れぬ點があつたやうに思はれる。又た恁うした彼の態度は、キーツが伊太利へ轉地の際、色々と世話を燒かうとした場合にも表れて居る。キーツも元來疑深い性質で、自ら「私は凡べての人を疑うた。」と、友人のBailey（ベーリー）にも言つて居るが、ハントも「シエリー程は、深くキーツを愛することが出來なかつた。それは不可能であつた。」ことを認めて居る。然しハントが、シエリーに次いで愛したものは、疑ひもなくキーツであつた。

一八一八年二月上旬のことであつた。ハント、シエリー、キーツの三人が、ナイル河といふ題で、各小曲（ソネット）を作つたことがある。キーツはナイルによりて、直ちに英國の風景を連想した。彼は常に田園を愛し、温室の艶麗な花よりも、野山に生えた可憐な花を好んだ。不治の病床に横りながら、「春のやさしい花を、今一度見たいものだ。」と嘆いたこともあつた。彼はこの小曲に於いて、ナイルの流域が、はてしもない荒野のやうに思ふのは、これ無智の然らしめる所、英國の河のやうに、豐饒な沃野であるに相違ない。

「綠の蘆に露も宿せば、快き日の出を味ひ、綠の島もあれば、得意に海へも急いで行く。」

Green rushes like our rivers, and dost taste
The pleasant sun-rise, green isles hast thou too,
And to the sea as happily dost haste.
Thou dost bedew

然るに哲學的なシエリーは、ナイルを智識の象徴に用ひて、「智識の人に

於けるは　埃及にナイルあるが如し」と六つかしくいつて居る。

Beware, O man! for knowledge must to thee,
Like the great flood to Egypt, ever be.

キーツの長篇エンディミオンも、シエリーの長篇「イスラムの叛亂」も、亦た作者の特徴を示して居る。前者は美しい希臘神話を、絢爛●華麗の筆致を以つて描き、讀者を眩惑せしめようといふ野心を以つて作つたもの、後者は人類の改善に一生を捧げようとしたシエリーが、未來に於ける人間社會の解放を豫言したものである。この二篇は一八一七年の春に、二人の詩人が約束をして、競爭的に長篇を作つたといふ説がある。しかし各主義●主張●詩風●性格を異にし、死ぬまで相互の理解を缺いた二人が、果してそんな約束をしたものか、疑はざるを得ないのである。キーツはシエリーが抽象的な理想にあこがれ、人類の改善を夢みて、之に熱中してゐる態度を理解しなかつた。シエリーもキーツの耽美的態度や、その一切を抱擁する官能的方面を理解しなかつた。エンディミオンの出版後一年、シエリーは伊太利で之を讀み、オーリアに與へた書簡中に之を批評して居る。「私が之を讀んで終つたのは、非常な賞讀に値することでせう。著者の意向は、終りまでそれを讀ませまいとするらしいのです。但し多少は、詩歌らしい最高●至美の閃きがあります。成る程それに書いてあることは、凡べて詩人の精神で觀照したのです。若しそれが五十頁位の斷片に印刷してあつたならば、何の躊躇もなく、一層キーツに感服したこと、思ひます。」（一八一九年九月六日付）又た Quarterly Review がキーツを攻擊した時に、シエリーは非常に憤慨し、その主筆に宛てた手紙がある。尤もこれは送らずに置いたが、

その中にも、「私はエンディミオンが、非常に缺陷の多い詩であることを、告白しようと思ひます」とある。勿論この詩はキーツの傑作でない。又たシェリーの評も正鵠を失して居らぬが、彼が Hyperion（ハイピーリオン）を除いての外、キーツの詩を褒めなかつたことは、即ちキーツの天才を理解しなかつた證據である。ハイピーリオンに就いては、ビーコックにこんな評をした。「私はそれを大變立派なものと思ひます。外の詩は殆んど無價値です。然しハイピーリオンが偉大な詩でなければ、現代詩人で、偉大な詩を作つたものが無くなるのです。」（一八二一年二月十五日）ハイピーリオンは、常にキーツを馬鹿にしたバイロンすらも感心した。巨人（タイタンズ）が滅びて、新たにオリンピアの時代が開ける所は、ヂョーヴが失脚して、プロメシュースの時代が始まる所に相似て居る。然しシェリーは、キーツの傑作たる Lamia（レーミア）, St Agnes（セント アグネス）, Isabella（イサベラ）, Odes（オーヅ）の美を理解しなかつた。

キーツはシェリーの「イスラムの叛亂」を寄贈された。それは數ヶ月の苦心●努力の結晶であつたが、彼は一向見向きもしなかつた。彼が弟に與へた書中に、「シェリーの詩が出たが、クキン●マブのやうに、色々批難の聲がある。氣の毒に、シェリーだつて、好い所もあるだらうに。」とある。この書簡は一八一七年十二月廿八日付で、「イスラムの叛亂」と改訂前の「ラオンとシスナ」を指すらしいが、果して讀んだものか疑はしい。翌年二月二十一日附で弟に書いた手紙には、「まだシェリーの詩を讀まない。」とあつて、その後の消息に、一向にこの詩のことが出て來ない。

恁うした二詩人の間には、勿論相互の理解も影響もなかつたのである。キーツはシェリーを敬遠し、嘗てマーローへ招待された時でも、詩人とし

ての獨立を保つために、斷然之を拒絶した。この時ベーリーに説明していふには、「私の範圍を拘束されない爲めに、シェリーを訪ねることを斷つたのです。つまり私はハントの弟子だといふ評判を取ることになりませう。」(一八一七年十月八日)先きにも申す通り、キーツは疑深い性質で、エンディミオンの創作●出版については、ハントやシェリーが色々助言を與へたのであるが、キーツは之を誤解して、弟に書いた手紙の中で、二人が詩のあら捜しをしたがつて居るというてある。シェリーは急いでエンディミオンを出版するなと警告したが、これにもキーツは耳を傾けなかつた。彼は「人の世話にならずに書いて見たい。」「完璧かどうかといふやうなことにくよ〳〵しては、到底詩なんか作れるものでない。」「大詩人の列に入らなければ、寧ろ早く失敗した方がよい。」といつて居る。斯くの如く二人の融和しなかつたのは、二人の性格●思想に、根本的の差別があつたからだ。シェリーは、キーツがあまり現實に執着するものと考へ、キーツは又た、シェリーがあまり思想に走つて、その詩風が淡々水の如く、少しも美の筆觸がないものと思つてゐた。

一八二〇年の夏、シェリーはキーツの病氣のことを聞いて、ピザへ來て養生するやうに、同情ある親切な手紙を送つた(七月廿七日付)。その一節に、「この冬を伊太利に過ごして、萬一の恐ろしい場合を避けたがよいでせう。あなたも之には御同感であり、又たピザやその近郊がお氣に召す限り、どうか私の家にお泊り下さるやう。妻も共にお勸めする次第です」とある。キーツも流石にこの親切な招待には、深く喜んだものと見えて、友人ブラウンに告げて、「前週にピザに居るシェリーから、大變親切な手紙をもらひ

ました。この冬を彼と一緒に過ごせといふのです」と。然るにキーツは、「あなたの御好意に甘へないと、先きではどうやら駄目になりさうです」と、如何にも曖昧に斷つて居る。然しキーツの謝絶は、必ずしも不思議ではない。シェリーはその手紙の終りに於いて、エンディミオンを再讀したが、その中に詩歌の寶はあるけれども、如何にも無分別に詰め込んである。こゝが讀者の我慢の出來ない所で、又たこの詩の賣れない原因も恐らくこゝにある。思ふに君は立派な作の出來る人だから、僕のやうにマナリズムを捨てゝもらひ度いと忠告した。さなきだに神經の尖つた病人は、必ず不愉快に感じたに相違ない。但しこの手紙はよく筆者の性格を現したもので、決して惡意のあつたわけではなく、正直に眞面目に、己れの信ずる所を打ち明けたのだ。

キーツも負けては居なかつた。彼は一矢を酬いざるを得なかつた。曰く「藝術家は大黒天に事へよ」と。(An artist must serve Mammon.) 隨分奇拔な言分ではあるが、これはシェリーが思想にのみ渴仰して、現實に即しないのを皮肉つたのであらう。更に語を進めて、「藝術家は自己集中がなければならない。自己本位でなければならないでせう。あなたは今少し寬大な態度を撓めて、も少し藝術家らしくなつて、作品の割れ目々々に礦石(あらがね)をおつめになるやう、御忠告申上げても、必ずお叱りあるまいと思ひます。あなたは半歲たりとも、翼を收めて居られたことはないのですから、かうした訓練はあなたに取つて、冷たい鎖で縛られるやうな感じが致しませう。」キーツは此の手紙と共に、一八二〇年出版の詩集を寄贈したが、その中に例のハイピーリオンがある。それをシェリーは更にアドネースの序文にも褒

めて居る。

一八二〇年十一月十一日、シェリーはハントに手紙を出して、「キーツは今何處に居りますか。私は彼の來るのを、今かゝと待ち受けてゐます。彼が來たならば、出來るだけの世話を致しませう。彼の生命は、最も貴いものですから、深く彼の健康を氣遣うてゐます。私は彼の肉體と精神との醫者となつて、前者は之を暖かに保護し、後者には希臘語と西班牙語とを教へる積りです。かうして一方に私を凌ぐ敵を養ふことになりますが、これが又た新しい動機と滿足とを加へる所以だと思ひます」と書いた。キーツが愛人と親友ブラウンとに訣れ、アカデミーから留學を命ぜられたセヴァンに伴はれて、ネープルスへ着いた時に、再びシェリーから、ピザへ來るやうに勸めて來た。復たもや彼は之を辭退した。二人はローマへ往くことに決めて居たからであつた。尤もシェリーがピザへ招いたのは、キーツを自分の家に泊らせる積りではなかつたのである。彼がクラヽに送つた手紙の追白に、「キーツはネープルスで大變わるいのです。ピザへ來るやうにいつてやりましたが、内へ招きはしなかつたのです。私どもはそれ程の資力がないのです」とある。この時シェリーは又た、Quarterly Review の主筆に送る積りで、キーツの境遇・病狀を說き、彼をかゝる悲慘な運命に突き落した批評家の、人道と正義との觀念に訴へてその反省を求め、ハイピーリオンがキーツの失望落胆のため、斷片に終つたことを述べた手紙を書いたが、これは遂に出さずに終つた。シェリーもバイロンも、Blackwood's Magazine と Quarterly Review とが、エンディミオンに酷評を加へ、ためにキーツが肺病になつたと信じて居たが、これは全く誤解であつた。又たキーツの詩

集に於いて、ハイピーリオンの題(タイトル)の下に、出版者の廣告として、著者がエンディミオンの批評に落胆して、遂に之を完成しなかつたとあるが、これも眞相を誤つて居る。

キーツは翌年の二月廿三日の晩に死んだ。これがハントのエキザミナー紙上で報道されたのは、翌月の十五日であつた。シェリーはこの新聞か、或はホレース・スミスの手紙によつて、初めてその訃に接したのである。彼はキーツに同情すると共に、批評家の殘忍なる態度を憤り、發して彼の有名なアドネースとなつた。彼は批評家に痛烈な攻撃を加へ、最後にキーツの不滅を說いて居る。然しアドネースは彼のエピサイキディオンと共に、彼の哲學的思想を吐露した傑作ではあるが、エミリア・ヴィヴィアニといふ少女が、詩の對象として方便の如く用ひられたやうに、キーツもアドネースに於いて、同じやうな關係にあるものと思はれる。シェリーの批評家攻撃は、屢々自分の受けた惡評の竹篦返しであつた。彼はキーツのことよりも、自分のことを三聯に亘つて述べ、その他ムア、バイロン、ハントよりも、彼自身の姿が最も著しい印象を殘すのである。シェリーも隨分惡罵嘲笑を受け、自分の詩は esoteric few（大乘的少數者）のためにものしたので、決して俗衆に讀ますのではないというて居るが、矢張批評のことは氣になつたと見えて、オーリアーに、自分を惡評するものがあるならば、切り拔いて送つて呉れ、褒めたのは君を煩すに及ばぬと言つて居る。尤も彼のやうに、少くとも百年以上、早く此の世に生れ出たものが、衆愚に苦められたのは怪しむに足りない。

斯くして二人は遂に、胸襟を披くの機がなかつたが、これは必ずしも不

思議ではない。キーツは藝術の爲めの藝術 (l'art pour l'art) を高調した耽美主義の詩人である。然るにシェリーは豫言者であり、社會改造論者であり、又た慈善家である。キーツに佛國革命の影響は無いが、シェリーはその思想●感情に、非常なる感化を受け、自己の主義●主張の正當なるを信じ、自分の嘗めた社會の制度●因襲の苦痛を、世界人類のために除かうとした。彼は遙々アイルランドまで出掛けて、政治運動を試みた。一八一七年には、「マーロー隱士」(The Hermit of Marlow)といふ名を以つて、「選擧法改正案」(A Proposal for Putting Reform to the Vote throughout the Kingdom) と稱する小冊子を出したこともある。彼は普通選擧を時期尙早と考へたが、苟も直接國稅を納めるものは、代表者を議會に送る權利があると主張した。

キーツは、人類の不幸に同情して、之に慰藉を與へるのが、詩歌の眞の目的だと定義したが、シェリーは人間を不幸より解放するために、歷史的傳統に挑戰し、慈善家としては、樣々な逸話を遺して居る。

キーツを客觀的詩人とすれば、シェリーは主觀的詩人である。キーツは早くより沙翁を耽讀して、その感化を受けたことが少くない。元來沙翁は客觀的で、客易に自己の主觀を現さず、恰も明鏡が物象をそのまゝ受け入れるやうなものである。この點はキーツが、沙翁に餘程似て居る。キーツの生活と詩歌とは、シェリーの場合のやうに、決して離して考へられぬやうなものでない。又た彼の傑作は多く一八一九年の作で、前年の夏に於ける蘇國旅行以後、既に不治の病が萌してゐたが、この影響が少しも詩歌に認められない。彼が特に野心を持つてゐた脚本を見ると、彼の詩に見えないやうな、一代の英雄や男勝りの女が現れて、よく彼の客觀性を窺ふこと

が出來る。或は彼はこの方面で成功したかも知れない。兎に角彼の詩は、人生の有ゆる方面を含むこと、沙翁以來の天才であつた。彼自らいふ所によれば、詩人には自我即ち主觀がない。彼は人生の善惡●表裏を洞見しなければならない。故に詩人は人間の最も詩的ならざるものであると。この思想は彼の Where Is the Poet? と題した詩には認められる。彼はスコットやムアのやうな愛國詩人でない。バイロンやシエリーのやうな自由の宣傳者でもない。テニソンのやうな道學先生でもない。彼は Powys（パウイス）氏の所謂「美の殉教者」で、飽くまで詩人らしい詩人であつた。

之に反してシエリーは、あまりに主觀が强かつた。從つて明鏡のやうな心を以て、さま〴〵な世態●人情を觀照し、之をドラマに表現するやうな型ではなかつた。彼のドラマは所謂 Resedrama（レーゼドラマ）（讀み本）又たは抒情詩劇（リ・ツク・ドラマ）とも稱すべきもので、之を舞臺に登すことは出來ない（序にいつて置くが、英國官憲は一九〇九年、チェンチの興行を禁じた）。元來彼の生活が即ち彼の詩で、彼の詩が即ち彼の生活である。サイモンヅ(J. A. Symonds) は彼の主觀性を論じて、チェンチのみは例外であると言つたが、矢張著者の主觀が明かに滲み出て居る。親殺しといふ題材を選び、而かも之に同情を表した樣子が見える。又た訟庭に於けるベアトリスの言動は、シエリーが因襲道德に反抗した態度に一致する。この通り主觀的であつたシエリーは、人世の實際を知らなかつたけれども、抒情詩人●自然詩人としては、何の差支もなかつたのである。彼は現實の社會に觸れることを欲せずたゞ理想にのみ隨喜渴仰して、到底世の俗衆と相容れなかつた。彼を理解する少數者の間にある時のみ幸福であつた。彼は都會の喧騷を避けて、靜かな田園に居住す

る時、或は波の上に舟を浮べ、或は岸うつ水の音に耳をすます時に、初めて神秘を感じたのである。彼は元來社會改造問題に興味を持ち、人類の解放に努力しようとしたが、實際的手腕を缺いたが爲め、種々の失敗や錯誤を重ね、健康は害はれ、胸には一生癒えぬ傷を負うた。彼は社會の文物制度といふものは、一朝一夕に破壞し建設することの出來ないものであることを知つた。彼は俗界を逃れ、自然に隱れ、自己の使命を詩人に於て見出した。だから彼の傳記を離れて、彼の詩を理解することは出來ないのである。

キーツは鋭い批評的精神を持ちながら、情緒の世界に住まうとした。藝術的詩人としては、科學者の眞理に對する態度に同情をしなかつた。

"Beauty is truth, truth beauty,"—that is all
Ye know on earth, and all ye need to know.

美は眞なり眞は美なり、これぞ
汝がこの世に知れるもの又た知るべきもの。

冷かな科學のメスに觸れては、天空に懸つた七彩の霓裳も、忽ち何の奇も妙もないものにほどかれて終ふことは、彼の何よりも嘆いた所であつた。

Do not all charms fly
At the mere touch of cold philosophy?
There was an awful rainbow once in heaven:
We know her woof, her texture; she is given
In the dull catalogue of common things. Lamia ll. 229—33.

之に反してシェリーは詩情に豐かな氣質を抱きながら、理性の世界を求めようとした。然るに彼の哲學は雲の如く霧の如く又た蜃氣樓の如く、之に詩情の華やかな色彩が加つたものに過ぎない。然るにキーツは健全明晰

の智識を備へながら、之を哲學的に又た系統的に發表する機會がなかつた。彼の哲學は彼の詩や書簡から拾ひ集めるより致し方がない。

キーツは官能的で、シエリーは精神的である。キーツは感覺世界の人で、シエリーは觀念世界の人である。キーツは冥想の人よりも、寧ろ知覺の人で、官能的對象に連想を求め、豊富なる語彙を以つて、有ゆる感覺世界を表現した。人生自然の有ゆる美を知覺して、之を再現する能力は、大詩人中にもキーツほどのものは極めて稀に見る所である。かくて彼は單に美のために、感覺世界の美しい繪畫を、吾人の想像に與へて呉れる。彼自ら「思想の生活よりも、官能の生活が望ましい」(ベーリーへ一八一七年十一月廿二日)といつて居るが、彼の詩句の中で官能的方面を描いたものは、あまりに數が多くて之を引用するの煩に堪へないが、彼の「ナイティンゲールの歌」(Ode to a Nightingal)の一節を示さう。

I cannot see what flowers are at my feet,
Nor what soft incense hangs upon the boughs,
But, in embalmed darkness, guess each sweet
Wherewith the seasonable month endows
The grass, the thicket, and the fruit-tree wild.

我が足許には何の花ありとも、
枝には何の柔き香かゝれりとも見得ず、
されど異香こめた暗の中に、
春の陽氣がめぐり來て、
草や藪や野の果樹(なりき)に、あたへる薫りをそれ〴〵かぎつける。

常に愛と美と理想とを追求したシエリーは、自己の内部生活の歴史を、

エピサイキディオンに見せて居る。彼の理想美に對する憧憬渇仰と、彼の禮讃の對象たる自然の靈に融合しようとする欲念とは、彼の藝術を生んだ衝動である。地上に於ける生命の終りは、眞の生命の始りで、かくて自然の一部となり、その本體を認識しうるものと信じた彼は、絶えず向上の一路を辿り、彼の純眞な魂は、いつも感激にふるへて居た。從つて眞の實在は、物質よりも精神に在るものと信じ、詩歌に於いても、官能的又たは具體的比喩を用ひないで、感覺を超越した抽象的概念を用ひることがある。これは彼の特徴であるが、又たその缺點で、印象の明確を破る原因となる。沙翁の如きは、抽象的觀念と、具體的の比喩を以つて表現するが、シェリーは靈的經驗の世界に讀者を導かうとし、却つて彼の豫期に反對の結果を生み出すことゝなつた。」エピサイキディオンに多くの不明の句があるのは、彼自らの內部的經驗を引き合ひに出すが故だ。具體的なるべき山水を描くにあたりても、彼は往々精神生活に適用すべき語を用ひ、その印象を曖昧ならしめる、例へばこんな句がある。

Huge as despair, as if in weariness,
The melancholy mountains yawns.....below

The Cenci III. I. 256—7.

絶望のやうに大きく物憂げに、
陰氣な山々が下に口を開けて居る。

次に自然詩人としての二人を考へて見よう。官能的のキーツは、自然の外部的美觀を精細に觀察し、之を寫す筆端は、悅の情にふるへて居る。彼は少年の頃から、田園の風光に親しみ、斷えず山や森や牧場に遊んで、鳥